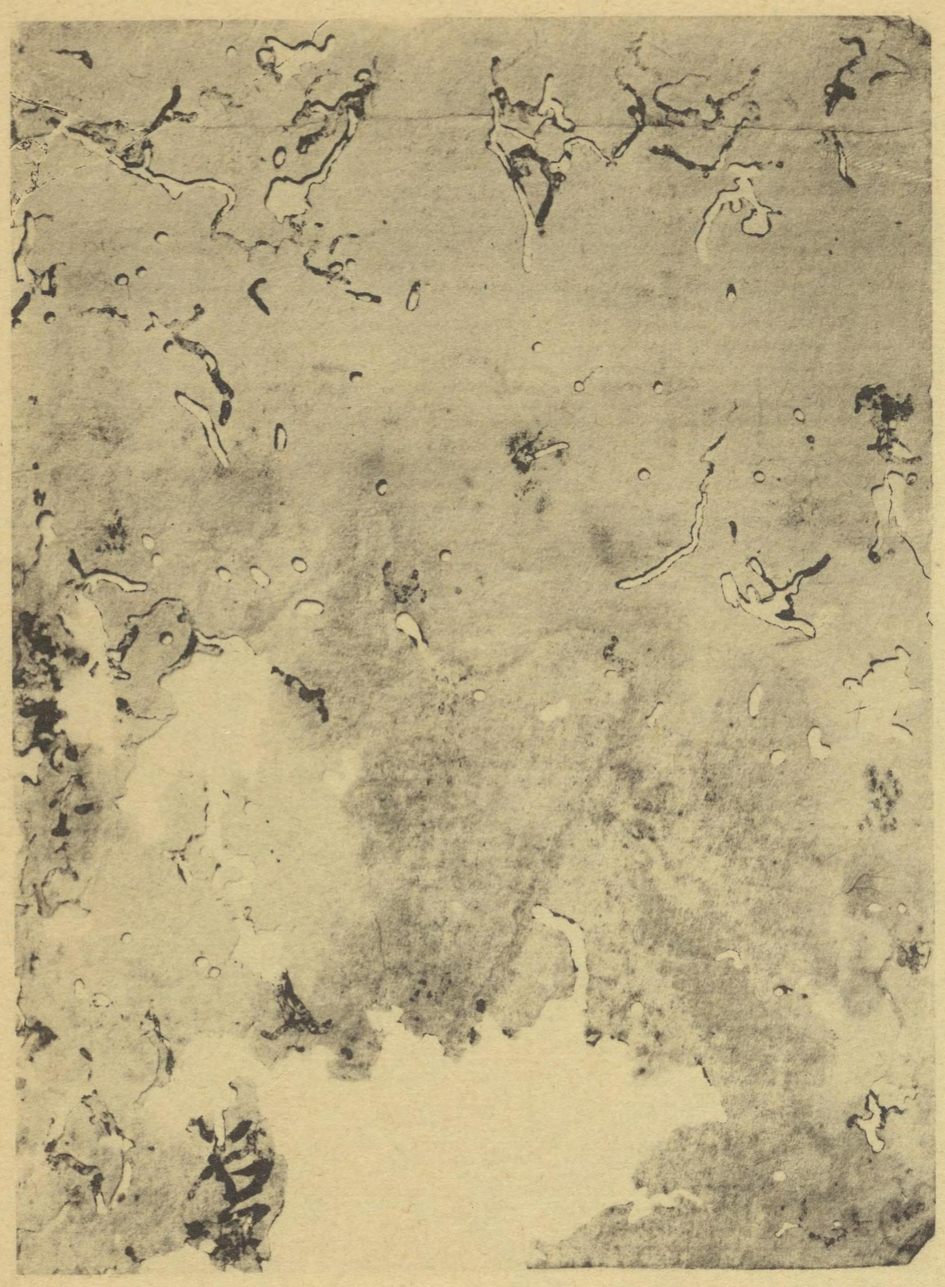
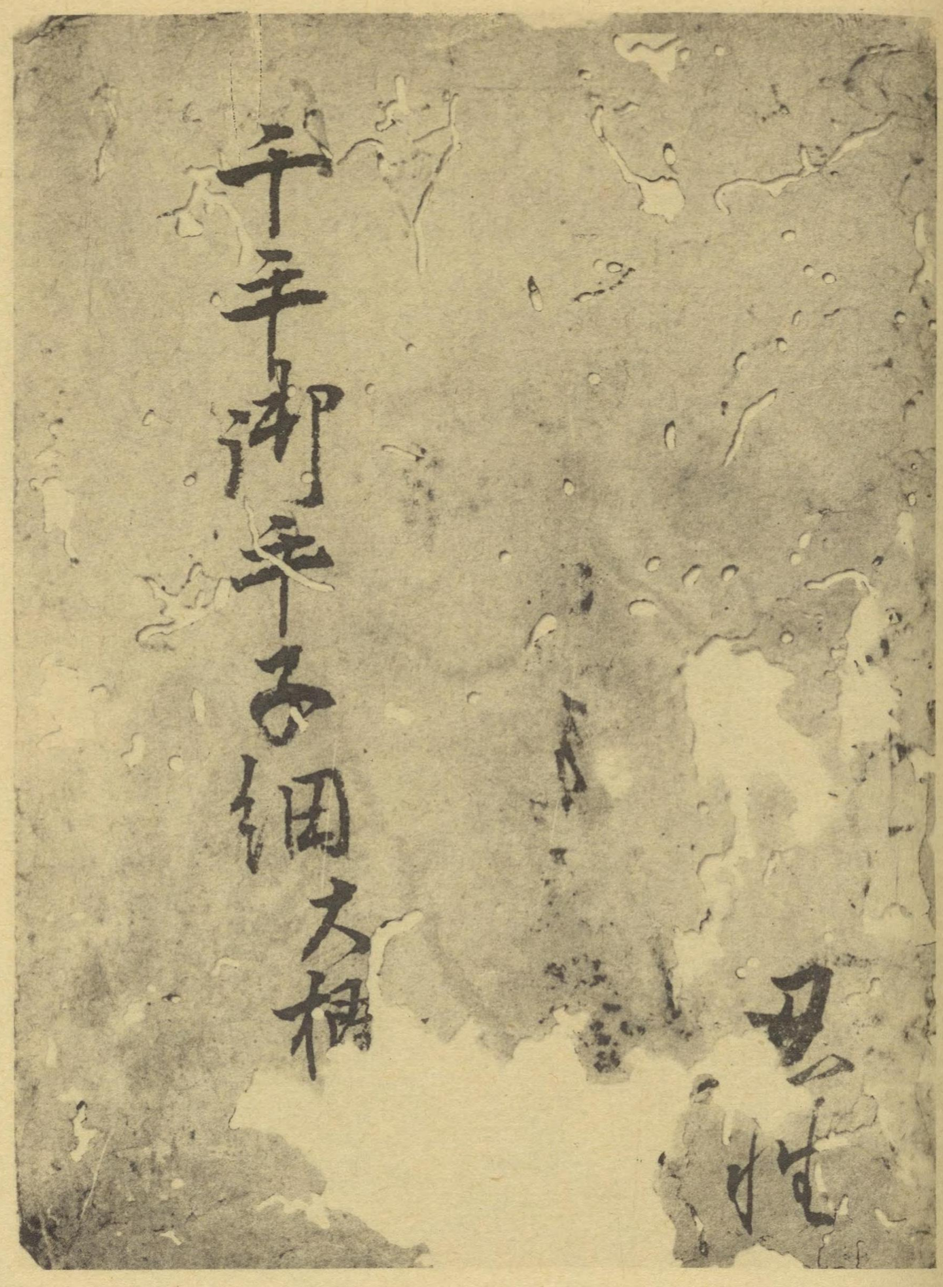
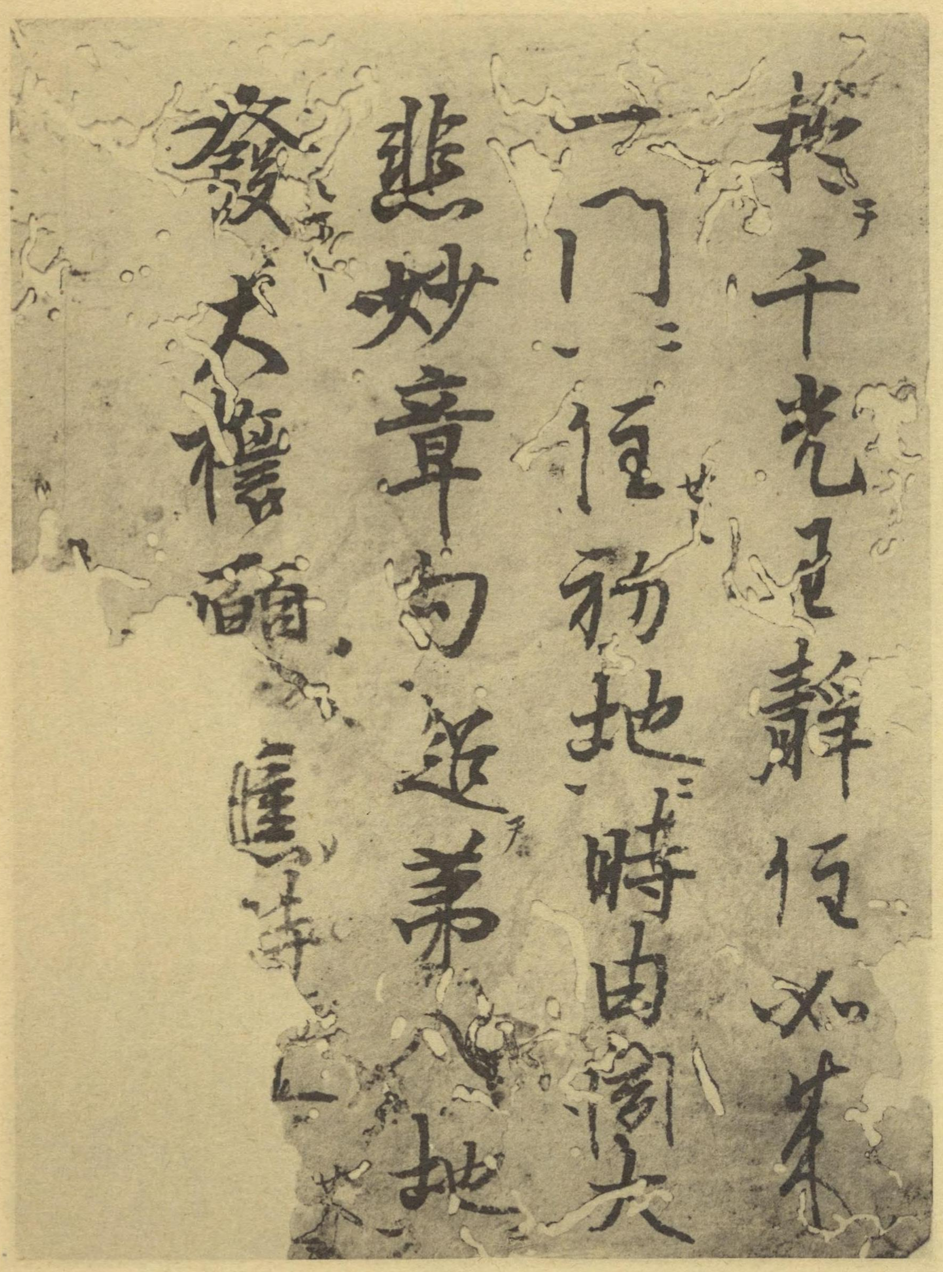
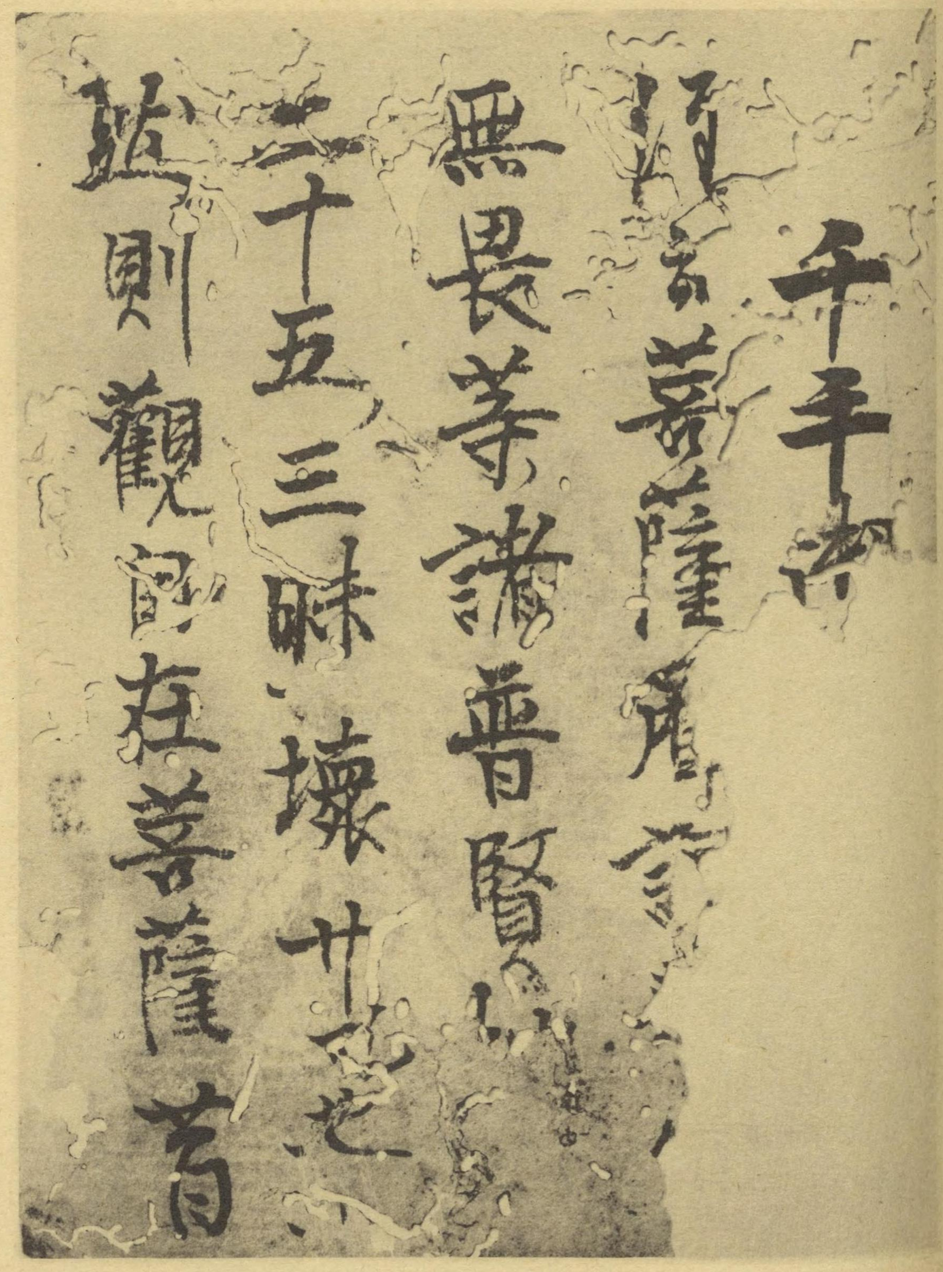
記

錄









十二月廿日安吉州
入衆沙門慧自
詣于堂寺以越州
之趣啓長老[illegible]倩
来[illegible]師雖[illegible]仙法[illegible]
信事慈[illegible]前而不
許之可[illegible]依之治罰
退并与落[illegible]民之
旨而還佛法之淡事
洞辨豈非大時[illegible]如
[illegible]隨
[illegible]國
[illegible]五之
[illegible]侍

[illegible]俗滿願[illegible]
蜂飛雜
趣若利之門解脫
如愚然[illegible]
住弥猛而[illegible]

[illegible]為西大寺長老獨行
法之風通俗須化導
之道已弱衰盛蒙
解脫之徐漸弱[illegible]
如斯業事無歎[illegible]

寂明寺相[illegible]祠[illegible]向心[illegible]
奉請也若於有下向[illegible]
法為國可為葉大之[illegible]
[illegible]遣宗雄施可久所望[illegible]
一夏之間[illegible]被致化[illegible]

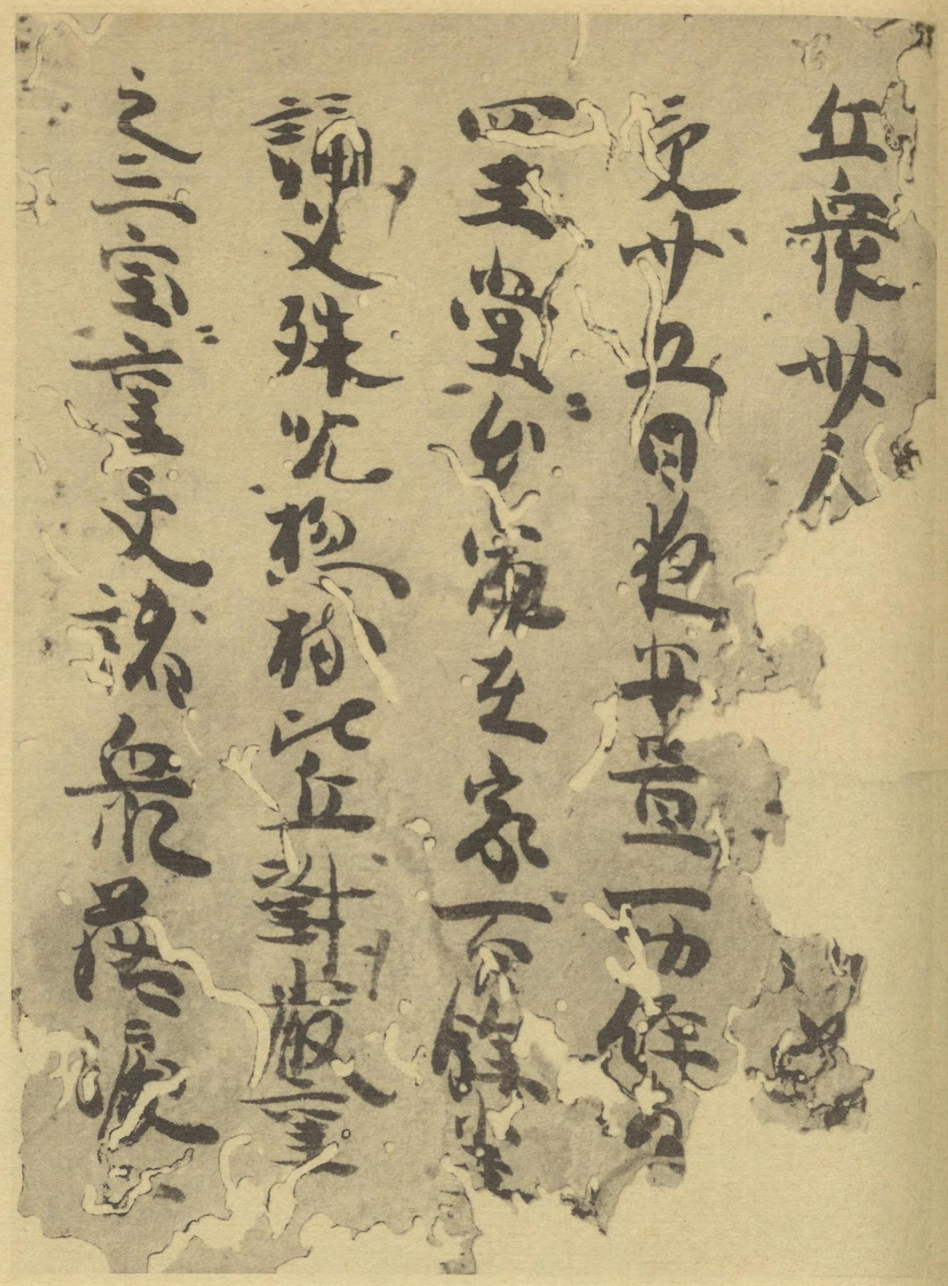
縱雖無慚[illegible]
法之理者[illegible]就中處[illegible]
為邊鄙之境人亦[illegible]
持之然孤一夏之[illegible]
早還不[illegible]

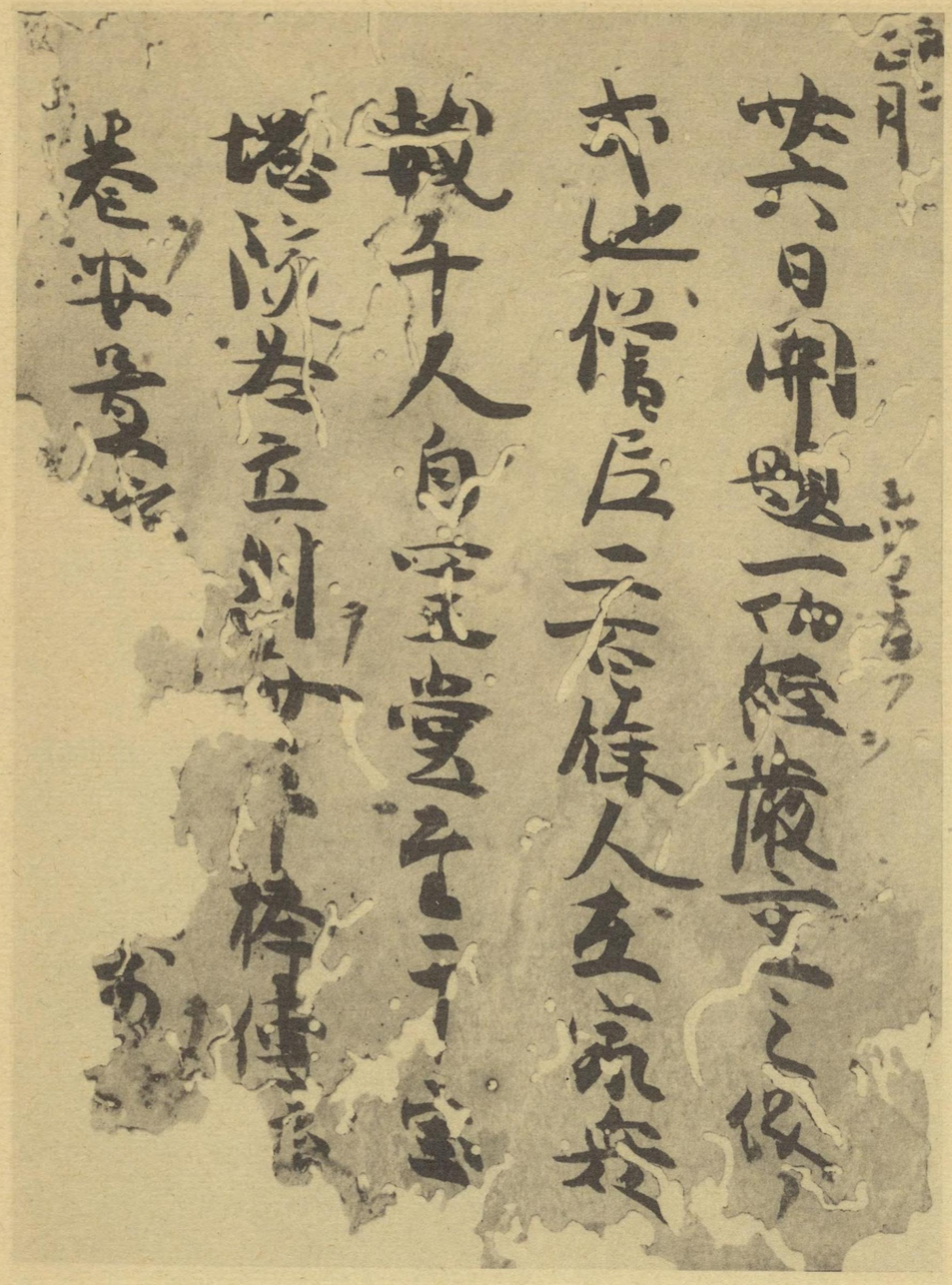
久[illegible]同法[illegible]
疑始之同從[illegible]利[illegible]
然
孔長二秀[illegible]三月二日見河
室為越州之使[illegible]

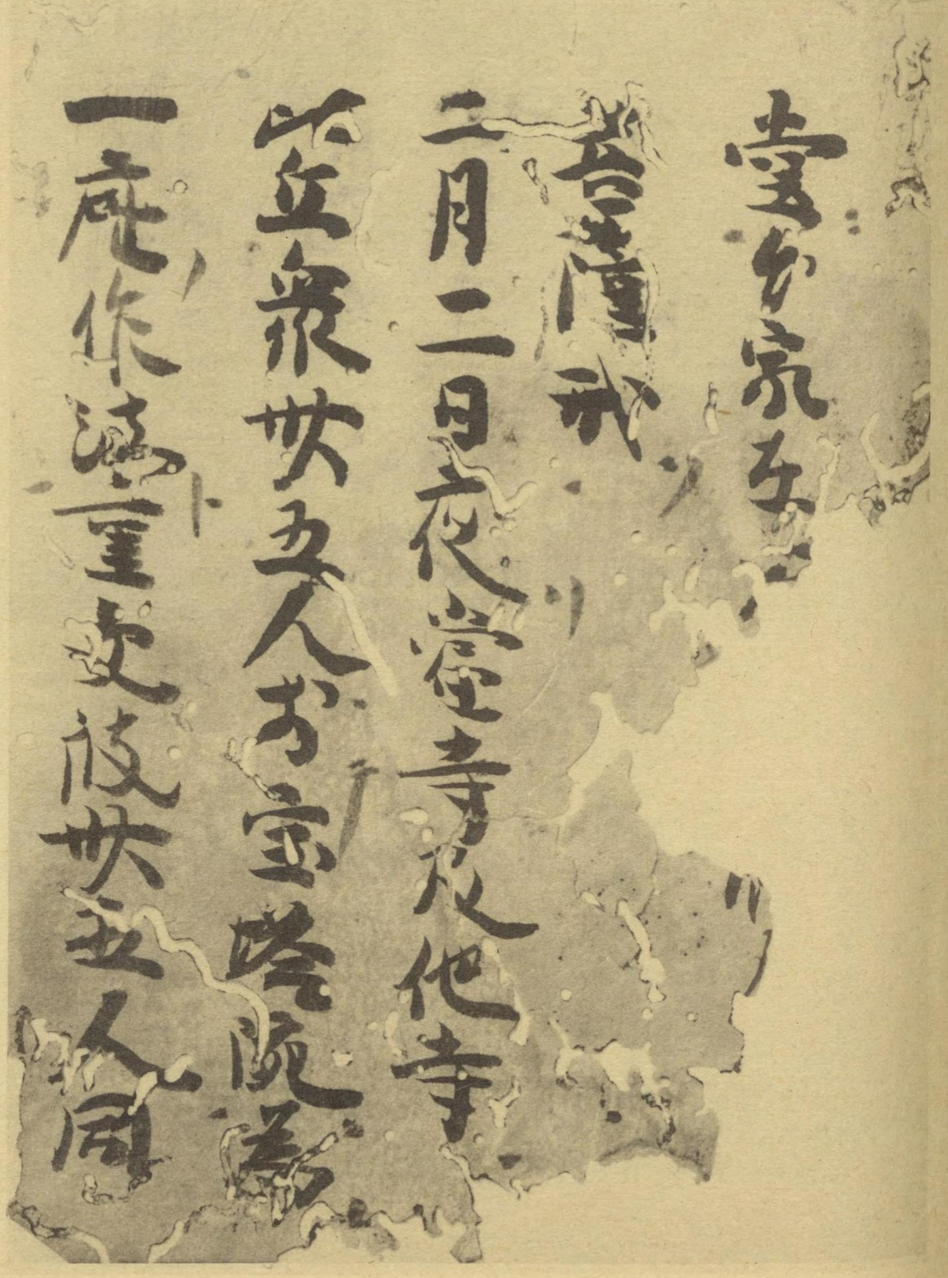
謁長老終夜談話[illegible]越
[illegible]不遠定[illegible]之詞又[illegible]
覽越州[illegible]見河之[illegible]
[illegible]自[illegible]文[illegible]
下向之由[illegible]
有[illegible]者[illegible]

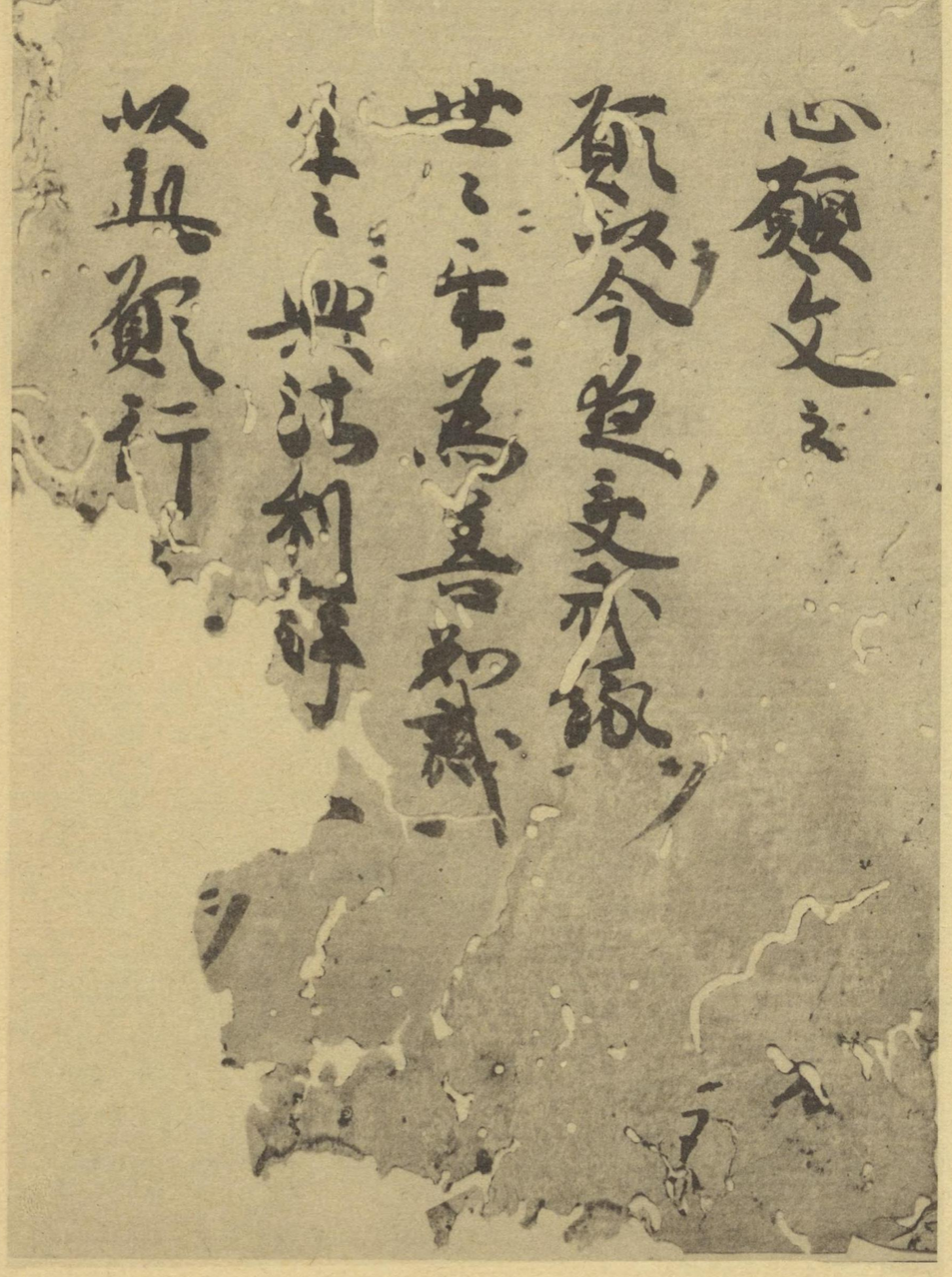
之長者
清之勿參發薩埵
同以衆生者有益者能
派梨之炎困冤室之苦
不可有悔心況於願老
辛況於帝遂路辛就中
佛法似感人皆迷目果之同
心見之者少邪見之者多
云彼嚴若歸心理者
參辛氏

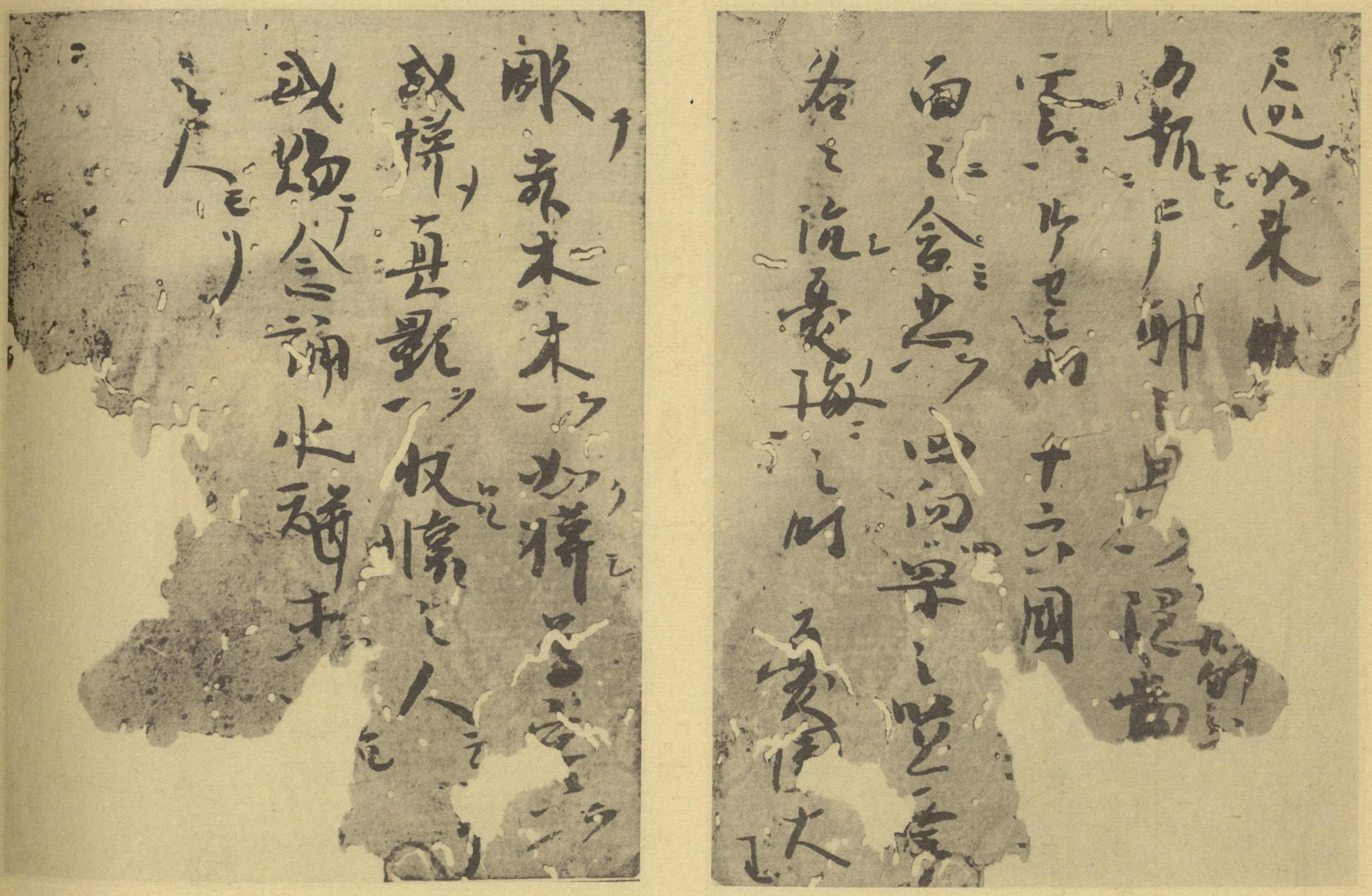
之其上二頁
然則稚為於衆生何違
三寶可令下向之世願伏已年
同日見何退出
開東下而必之由風同之
諸寺之僧尼逃迹之男女
浮命之不定然再食之難
敢以家事在家或有
或於此趣通別之文
綿与不能











金澤文庫

忍性

忍性

金澤文庫

忍性

忍性

金澤文庫

金澤文庫

金澤文庫

金澤文庫

金澤文庫

金澤文庫

斯一藏真詮為先婦養珠院宗常
莊嚴報土　大永戊子孟秋日　平氏紹

金澤文庫の藏書には、金澤文庫の印が踏されてある。大別すれば、朱印と黒印との二種になるが、その朱印にもいろ〳〵あり、黒印にも種類があり、又鎌倉時代、足利時代といふ風に變遷がある。此にその標本として五種の印を收載した。

稱名寺の藏書には、金澤稱名寺の黒印が踏してある。これは金澤文庫の印に比して、大分見劣りのするもので、時代も少々下るやうに思はるゝ。此に收めたものは同じもののゝやうで、或は一種よりなかつたかも知れぬ。

金澤文庫や、稱名寺の如き公共の性質を離れた、個人の印を踏した典籍もある。これは藏書印と觀るべきものであらう。忍性の印は朱印で、宋槧の律書に多く殘つて居り、中には寺院の印章の上から重ねて踏したものもある。此に收めた中で、一は「西大寺」朱印の上に、一は「清冷院」朱印の上に重ねて踏してある。西大寺はいふ迄もなく、奈良の七大寺の一、清冷院は或はその子院か、又は鎌倉極樂寺の子院であらうか。

圓種の朱印は宋槧の止疑書に二顆並べて踏してある。他には餘り覽ぬやうである。

「斯一藏眞詮爲先婦養珠院宗榮莊嚴報土、大永戊子孟秋日平氏經」とある黒印は、宋槧經の斷簡に踏されてあるが、こは一類の經（例へば一切經、又は大般若經の如き）を寺院に寄進するに際し、施主の新に造つて踏したものであらう。

金澤訪書記

目次

金澤文庫を過ぐ	一頁
金澤文庫に墜簡を訪れて（上）	一一頁
金澤文庫に墜簡を訪れて（下）	二一頁
黄落の秋	三五頁
三たび金澤文庫を訪ふ	

金澤訪書記　正誤表

1頁	3行	絃は弦の誤	
17頁	5行	聞慶は開慶の誤	
同頁	23行	宋刊は宋朝の誤	
25頁	8行	開板かは跋ありの誤	
42頁	7行	第二十の二巻は第二十二の巻の誤	

金澤文庫を過ぐ

一　湘南の秋

秋は舊都に訪れて、朝寒の庭に立てば、木犀の香がどこともなく衣を襲ふ。「白木の弓に絃張らむ」爽涼の氣天地に滿ち、澄みわたる空に漂ふ雲のちぎれ、旅路(たびぢ)戀しい時節となつた。

九月二十九日午後七時三十五分東京に向ふ。佛教學協會出席の爲めなり。會は十月一日から始る。されば月末のひと日を湘南の秋に遊ばんとするのだ。

湘南は思ひ出多きところ、建長、圓覺五山の鎌倉から、逗子や葉山の村々、わけて金澤の稱名寺は南都の學僧湛睿の遺跡、學生時代からいく度か杖を曳いたが、學事匆忙近年は無沙汰の裡に過してしまつた。然るに、神奈川縣の手で、稱名寺の古書が整理され、神奈川縣立金澤文庫が出來て、その評判の凄じいものがあるので、百聞は一見に如かず、學徒の本分としても、訪書の必要を感じ、開會前の一日を利用せんとするのだ。

三十日午前五時五十何分横濱驛着、卽ち下車して朝餐を攝る。文庫の開館は八時であらうから、餘り早く徃つては却て困る。かくて七時三十分、湘南電車に乘る。幾つかのトンネルを拔けて海岸を走る。三十分足らずで金澤文庫驛に着く。下車して山の手に入る。昔は松林の間に、三々五々と藁ぶきの家が見えて、ひなびた漁村であつたが、今は舖裝した大道が中央に通じ、更に並行せる別の路を電車が走つて居る。詩趣も史味もケシ飛んで、コレハ〳〵と驚かるゝばかりの變化、此處にも1933の風が吹く。

だら〳〵といくらか坂になつた路をゆくこと五町、山門に金澤文庫の四字を大書したペンキ塗の棒杭が立つて居る。

卽ち稱名寺で、文庫はその境內の奥まつたところに在る。

稱名寺は樹林の中に在る閑(しづ)かな古寺だ。その昔訪ねた頃は、さゝやかな樓門の屋根は青苔厚く封じて頽(くづ)れんばかりまるで水彩畫のやうであつたが、今は修繕を經て新しくなり、苔もみえず、極めて殺風景な姿である。二町もあらうと思はるゝ長い境內をゆけば、突當りに本堂があり、左に池がある。その池の奥の林の中に、新しい洋館の棟がみゆる。謂はゆる神奈川縣立金澤文庫である。

聞けば、電車も昭和五年の開通、文庫も同年の建築だそうだ。現代風の瀟洒な二階建、一見正倉院の休憩所を聯想させる。庭には朝の光を一杯に吸うてダリヤが澤山咲いて居る。頽廢した古刹の隅の洋風建築に、今樣の草花を配し

て、北條氏六百年の夢は訪ぬべくもないが、さりとて、大してめざわりにもならぬ圖書館である。

二　金澤文庫

刺を通ずれば、文庫長關靖、司書熊原政男の兩氏いと慇懃に應接せらる。先づ目錄の一覽を求むる。文庫は昭和四年一月起工、同八月竣工、五年八月落成式を擧げた鐵筋コンクリートの二階建、階下正面應接室兼事務室、右側は整理室、左側は書庫并に閱覽室、階上は古書古器の陳列室となつて居る。藏書凡そ一萬卷、目錄は同七年八月一先づ整理したもので、内容に拘らず、書名を發音別に分類し、五十音順に記載してある。但し文書は此の外なり。

かくて、應接室を出で、閱覽室に往き、目錄を通覽する中、熊原司書は拙著寧樂刊經史を持ち來りて、舊槧本の鑑定を請はる。夫れを機會に、先づ寧樂刊經の調査にかゝり、次に古鈔本特に逸書稀書に及び、倶舍、華嚴、律の寧樂佛教の古鈔本や論草類から、天台、眞言の諸宗に及んだ。併し淨土教や外典は既に調査した人もあり、第一時間が無いので、又の機會に讓ることゝした。

三　寧樂の刊經

稱名寺第三代の住持湛睿は東大寺凝然の弟子禪爾の資で、又凝然にも受くるところがあり、稱名寺で起信論教理抄演義鈔纂釋を著し、俊才は凝然の資、その弟子靈波は又湛睿に受け、倶に稱名寺に居り、志玉は湛睿の弟子總融の資で、これも稱名寺に居たことがある。斯樣に東大寺戒壇院の律僧が住して居たのだから、華嚴と戒律に關する舊槧古鈔の存するは固より當然である。

司書君の寧樂刊經史の話から、寧樂の刊經を目錄に就いて一覽すると、春日板の成唯識論、般若心經幽贊、圓覺經、瑜伽論、倶舍論頌疏、夾科肇論などを除く外、東大寺の華嚴に關するものと、西大寺の戒律に關するものが殆んど全部である。卽ち華嚴では弘安の五教章、永仁の起信論義記、嘉曆の探玄記(三部もある)、正慶の隨疏演義鈔など、西大寺の方は、文永の表無表色章科分、弘安の梵網古迹記輔行文集など、何れも既知のものであるが、今、余が親しく手にとつて覽たものゝ中で、學界未知の刊經に就いて紹介を試みやう。

一倶舍論頌疏　廿六帖本と廿二帖本

板式は二本共同一、折本、五行十七字、書風は宋風、第十九には湛睿自筆の題簽と署名がある。(他にもあるかも知れぬが皆は覽なかつた)料紙は和紙であるから宋板の覆刻と見える。恐らく鎌倉の中頃以後に、東大寺で開板されたもの

で、他に類本が無い。寧樂としてはどうしても倶舍關係の古い開板がなくてはならぬと思つてゐたが、斯書を得て、多年の疑問が氷釋した。開板の事情と年代を徴すべき刊記は無い。

一華嚴經疏　一上　一帖

折本、五行、二十字、高麗板の模刻と見ゆる。或は宋版の覆刻かも分らぬ。澄觀の著を正慶元年理覺の開板、東大寺に於ける隨疏演義鈔、探玄記と同一開板者の手に成つたもので、板式は隨疏演義鈔と同式である。唯一帖より無いらしいのは遺憾である。左の刊記がある。

右爲令法久住利益衆生、所令開刊也。

正慶元年壬申月　日庸醫法橋理覺。

一四分律注比丘尼戒本　三帖

折本、五行、本文大字十七字、註雙行十七字、正安四年正月宗眞の開板に係る西大寺系のもの。下巻の終に戒律復興に關する建長三年三月總持の跋あり、次に同年六月西大寺叡尊覆勘針正の記あり、終に正安四年比丘榮眞開板の記がある。

此注尼戒本令彫印板志、
近訪慈母之冥路、遠助尼衆之行化、冀
塵露山海昭提□□兩[　]
于時正安第四壬寅孟春正月
比丘榮眞。

一金光明經　二卷本と四卷本

二本共同板、卷子本、十七字、白い楮紙に粗墨で摺つたもの。金光明經の開板は平安末以降、寧樂で行はれて居るが、斯板は初見である。次の儀軌と料紙書風を同じうするから、鎌倉時代の中頃、興福寺での開板であらう。

一隨求卽得眞言儀軌　一帖

折本、五行、十七字、金光明經と同形式。但し卷末の一紙を存するのみ。左の刊記がある。

天福二年甲午冬之比、於興福寺松院邊、奉彫之畢。勸進善增。
願以此功德　普及於一切　我等與衆生　皆共成佛道。

以下は既知の分ではあるが、稀本で、學界の參考に爲るものを擧げる。

一夾科肇論　三帖

折本、本文大字、上欄に科を加ふ。惜むらくは刊記初の一行を存し、終の一紙を失うて居るが、殘つた一行の刊記は

夫今論者佛法之大綱、方等之心髓、文約而義とあるに依つて、嘉元丙午素慶の開板に係ること疑ひない。余かつて至徳二年の墨書ある點本を覽、その料紙も楊墨も甚しき粗本であつた爲に、聊か疑を存したが(續寧樂刊經史)、その後、身延山文庫に下巻を藏するを知り、今復此に三帖を覽、殊に料紙が硬く厚い楮紙で、正しく時代に相應するを覽て、嘉元四年素慶開板の夾科肇論あることを確認した。因に素慶は正應の中論偈頌、永仁の法華義疏の開板者である。

次は寧樂の刊經ではないが、三論宗に屬するから、此に附記する。

一大乘玄論　殘闕

もと粘葉本、鳥子兩面刷、幸に刊記の最後の一枚が殘つて居るので、永仁三年寂性の開板たる事が分る。卽ち醍醐寺の開板である。刊記の終に云く。

于時永仁三年三月二十一日、菩薩戒比丘寂性。

斯板一帖東寺觀智院、五帖(完本なれど刊記を闕く)積翠文庫、第五の一帖成簣堂文庫に藏し、成簣堂本に依つて、始めて他の兩本も永仁板たる事が明かにされた。今斯本も亦夫を裏書する貴重な資料である。

四　宋槧本

以上の外、本邦の舊槧本では、二三の高野板、首楞嚴經義疏注經などの五山板、各種の大般若經が目錄に載つてゐるが、親しく覽る時間が無い。淨土教に關するものもあるが之れも亦同樣。

經の一部と、

一法智遺編止疑書　宋繼忠撰　一冊

など四明天台に關する板本を一瞥した。此等の天台書は多く斷簡零葉に過ぎないが、東福寺普門院の十義書などを想起して、興趣の盡きざるものがある。次に目錄に見ゆるもの丶中、外典では、

文苑英華　殘闕

南史列傳卷三十八　眉山七史本一冊

が眼についた。勿論借覽する時間はなかつた。之も目錄の記載であるが、華嚴と律に關する左のやうな多數の宋槧本があり、それも同本が少きも二三部、多きは五六部にも及んで居る。卽ち重複して澤山殘つて居るのである。以て鎌倉時代の寧樂佛教が宋代の華嚴及び戒律の著述を如何に多量に輸入したかゞ窺はれ、未だ潑剌たる生命を有した事を

證明して居る。卽ち華嚴では長水(子璿)晋水(淨源)の二水、律では允堪、元照の二派、杭州を中心と爲る南宋の教學が滔々として流注して居るのは壯觀だ。(古鈔本の部參照)

(華嚴)

一圓覺經略鈔　六帖
一圓覺經略注　一帖
一華嚴一乘教義分齊章科師會撰　一帖

(戒律)

一四分律含註戒本疏　數部(以下同じ)
一四分律含註戒本疏科
一四分律含註戒本疏行宗記
一四分律刪繁補闕行事鈔
一四分律刪繁補闕行事鈔資持記
一四分律刪繁隨機羯磨
一四分律刪繁隨機羯磨疏
一四分律刪繁隨機羯磨疏科
一四分律刪繁隨機羯磨疏濟緣記
一四分律刪繁隨機羯磨疏正源記
一四分律刪繁隨機羯磨疏正源記科
一四分律比丘含註戒本
一四分律毗尼義鈔
一四分律毗尼義鈔科
一釋門歸敬義通眞記

五　古鈔本

此の文庫の古鈔本は隨分澤山あるが、多くは鎌倉から南北朝にかけてのもので、その後のものもあるが、貴重の點に於いて前者の比では無い。內容からいへば依然(やはり)華嚴と律のものが多い。今親しく一覽したものゝ中、研究上重要な

一　法華經論子注　巻下　一帖

粘葉本、本文五行、註十行、「尊者舍利弗說偈、金色三十二(相カ)十力諸解脫同共一法中而不得此事」以下を注したもので、鎌倉時代の寫本。撰者の名を闕くが、正倉院聖語藏に、法華論經子注第一、一巻あり、寧樂朝末か平安朝初と思はるゝ寫經で、巻首が闕けて、「論曰頂禮大覺海淨法無爲僧」以下を存して居る。共に法華論の註であるが、彼は巻上、これは巻下で、一具を爲すものかどうかは詳檢を俟たねば斷言し難い。天平勝寶四年の文書に、「法華論子註、圓弘、三巻」とあるから、圓弘の撰であらう。斯書は萬字、大正各種藏經に未収である。

一　華嚴經談玄決擇　六帖

一、二、四、五、六と巻數不明の一帖(恐らく三か)がある。粘葉本、八行、十六字又十七字、湛睿の手澤本で、中には自筆の題簽と署名がある。巻一の奥に依れば、弘安八年九月高山寺に於いて寫すところである。斯本は巻首に、

上京開龍寺圓通悟理大師賜紫沙門鮮演述。

とあり、遼の上京で撰述されたもので、從來巻一を闕いて居たが、斯本で完本と爲る。萬字藏(續)には巻二以下五巻を収め、大正藏は未収。

一　華嚴法界觀智燈疏　一帖

粘葉本、七行十九字、巻首に、修大方廣佛華嚴法界觀門智燈疏と標し、次に、皇宋紹興府光相寺沙門釋紹元(撰者)の自序があり、巻末に建武五年高山寺に於いて、曆應二年十二月武州六浦庄金澤稱名寺に於いて、人に誂へて湛睿の寫させた旨の識語がある。各種藏經未収である。

一　華嚴論節要　三帖

粘葉本、九行二十字、巻首に、大定乙巳云々の海東曹溪山沙門智訥の序がある。高麗僧知訥が李通玄の著を節略したもので、知訥は普照國師と稱し、眞心直說、修心訣、看話決疑論、圓頓成佛論などの著があり、多く萬字藏經(續)に収められてある。巻一の終に、「永仁三年十二月五日再見了(中略)佛家貧人圓種」の朱書がある。斯書の原本は高麗板と見え、開板者として、冲湛、慧諶、法寶は玄奘門下の法寶か。然らば石山本の一乘佛性究竟論との異同如何が問題と爲る。萬字藏(續)には、一乘佛性權實論　法寶撰　三帖

論第三のみ第九十五套第四冊に収めてある。

一　隨疏演義鈔會解記　觀復撰　十帖

これは宋朝華嚴の撰述で、參考すべき書である。又

一五教章義苑疏第六　道亭撰　一帖
一注華嚴同教問答　師會撰　一帖
一還源觀疏鈔補解　淨源撰　一帖
一一乘義章明宗記　師會撰　一帖

など珍しいものではないが、宋朝華嚴の撰述が連に寫され、湛睿の手澤本であるなど、興味が饒い。

其の他、湛睿の撰述が寫されて殘つて居るのは、固より當然であるが、

一起信論教理抄文義拾遺　湛睿撰　殘闕　一卷
一華嚴演義鈔纂釋拾遺　湛睿撰　殘闕　一卷

など、兩書に拾遺のある事は未知の事實である。又演義鈔纂釋は殘闕二卷が藏せられてあるが、東大寺所藏の二册(中に卷五と記したるものあり)との異同も考ふべき問題である。

律宗では、四藥綱義などある外、

一三宗綱義補闕　卷中　一帖

があり、これ亦斯書に補闕があることも、之れに依つて分つた。

次に他宗では、禪宗の悟性論や、破相論の古鈔があり、天台では弘決外典鈔や、傳述一心戒文(三帖、文保二年寫)があり、內證佛法血脈等見聞(一册、心慶手澤本)のあるのも珍しい。こは禪爾、湛睿一派が新來の禪宗に興味をもつた爲めであらう。就中、傳述一心戒文は惠心院傳來の良祐寫本と對校すべき好資料である。尚、顯密成佛圓通心要のあるのも、華嚴と密との關係上甚だ面白い。

六　論草類

論草類は華嚴、律に關するものが多く、俱舍に關するものも少々ある。又、眞言の聖教類も非常に澤山ある。夫れ等は一册も親しく覽る時間はなかつたが、目錄に依つて紹介しやう。

一解脫門義聽衆記　十帖
一信種義聞集記　一帖

があつて、前者は湛睿の、後者は智照の手澤本とあるのは面白い。解脫門義と信種義は共に高辨(明惠上人)の著である が、鎌倉末葉に夫れ等を講じて居た事が分り、高辨の華嚴學上の影響の大なるものゝあつた事が考へられる。

一華嚴孔目章述草　一帖
一菩薩戒本宗要樞鏡文集第六　一帖
などもあり、後者は盛譽の手澤本とある。

七　文書記錄

文書や記錄も澤山あるといふ。殊に文書は數千通あつて、大分整理が出來たらしい。併し時間の少い爲め、夫れ等には手を出す暇が無い。唯左の二點を一覽したるのみ。詳細は次の機會を期する。

一凝然大德消息斷簡　二葉

梵網菩薩心地品卷上(承久板)を刷つた裏面にある。こは同師の消息を飜して、追薦の爲に、經を摺つたものと見える。

一枚には署名があつて、本如房に宛てたもの、本如房は湛睿である。一枚は署名も宛名もないが、右と同筆であるから、凝然の筆跡に相違はない。前者は僅に五行、後者は卽如房に關するもので八行ある。內容はいふに足るものでは無い。

次は前田家本の關東往還記と一具を爲す叡尊(興正菩薩)の鎌倉下りの日記の一節である。斯本は近頃段々喧傳されて來た聖教形の一帖で、表紙に、「千手御手子細大概」とあり、右側に忍性とあり。卷首の一枚だけが千手觀音のことで、二枚目からは日記と爲り、六行八字に寫してある。

弘長元年十二月廿八日

入宋沙門……

本文は忍性の筆に非ず、別筆で、弘長元年と小さく右肩に書いた四字は稱名寺劍阿の筆であるといふ。叡尊研究の好資料である。

其の他、理覺の隨疏演義鈔開板に關する文書も出で、種々面白いものもあるといふことである。

×　×　×

×　×　×

以上は午前八時より午後の四時頃迄、寸時の休みもなく、次から次へ請求して研究した結果の一斑である。斯日は土曜日とて、東京方面から學生諸君の參觀が多く、大正大學あたりの學生や(隆寬、覺明を覽る爲であらう)女學生まで隨分繁昌した。文庫長も司書も非常な多忙に拘らず、快く閱覽の便宜を與へられた事は、誠に感謝に餘りある次第である。日沒前に東京に着すべき用件があるので、四時頃辭する。

館を出づれば、日は既に傾きながら、外は汗ばむ程の好晴、樹間にはつく〳〵ほうしが鳴いて、湘南の秋は正に闌ならんとする。此閑寂なる古寺の空にも、終日飛行機の爆音を聞かされたのは、頗る不愉快であつたが、これも謂はゆる非常時ならば仕方がない。さらば、六浦の庄よ、金澤の里よ。

伯樂一たび冀北の野を過ぎて、馬群空しとは、昌黎集で讀んだと思ふが、今度の訪書は夫れどころか、呑舟の魚でさへも網羅する事はむつかしく、況んや細鱗に至つては、どれだけの見殘しがあるか分らぬ。嚴密にいへば、金澤文庫の門前を通つたといふ程度の訪書である。

（昭和八年十月六日、京都に於いて稿了。）

である。日沒前に東京に着すべき用件があるので、四時頃辭する。

金澤文庫に墜簡を訪ねて（上）

一

月やいづこ、雲やいづこ、見はてぬ夢の忘れかねつゝ、調査未了の典籍、生あるか、靈あるか、日ごと、夜ごとに人の心を惱すぞうたてき。いざさらば、冊府の根柢に究到して、無盡の煩惱を斷滅せばやと、再び闌けゆく湘南の秋を訪ふ。

×　×　×

十月廿七日の朝、こゝ金澤に着いてより、はや一週日、あさな、ゆふなに、往き來する稱名寺境內にそゝり立つ、五六本の銀杏樹も、大分黃ばんで、雨には化けそうな影を落し、入相告ぐる鐘の聲、六浦の波を照す後の月、そゞろに夜寒が身に泌みる。金澤氏三代（實時、顯時、貞顯）の墓には、野菊の露しげく、文庫の菟（には）のダリヤの花もうつろふて來た。調べゆく斷簡のあいま〳〵に、燻銀（いぶし）の小具足着けた蠹魚の僂（はかな）き運命を憐れみつゝ、佚書やある。奇書や隱ると、心ゆくばかり、なごやかな月日を送るは、古典の學徒にのみ惠まれた愉悅である。典籍の廢墟といふことなかれ、鎌倉武人の精神生活と、禪律僧徒の講學生活と、關東中世の文運は、此處を離れて、いづれに尋ぬべきぞ。われらは文化檢討の嚴肅なる使命を高唱する。

二

延慶元年、湛睿の鈔した顯密圓通成佛心要（粘葉本）本の見返に、左記自筆の朱書がある。

以朱點交之、文字皆是新渡之宋本也、若有

傳寫之人、莫墨朱混和書寫之。

卽ち新渡の宋本を以て對校し、かつて鈔して置いた本に、朱を以て校異を施したといふのである。而して、謂はゆる新渡の宋本とは、延慶二年の比、入宋歸朝した禪侶道眼の將來するところである。夫れが古來本邦流傳の本と少異があるから、正和三年九月、泉州久米多寺に於いて校合し、朱を以て點出したのである。本末二帖、各大體同じ朱書の

識語がある。(今は本の分を出す)

延慶二年己酉比、有入唐之禪侶、名道眼房、奉渡一切經之時、
適感得此書印本、同亦渡之、與和國流傳之古本、少
有同異、故今校合之、卽以朱砂點出之、並是新渡宋
本也、若有後寫者、努力莫混和兩本、先純寫一本、
更點付一本矣。于時正和三年甲寅九月五日、於泉州久米
多寺記之。　　貧道沙門湛睿通俗四十廿四

又、新渡の宋本には、本邦の流布本に無い後序が附刻してある。文庫にその後序などを書いた別冊がある。夫に依ると、

顯密圓通成佛心要幷供佛利生儀　後序

門人比丘　性嘉述

恭聞大日雄尊始王華藏之界、圓音妙法遍周帝網之區云々の一文がある。而して、その文章は

但竭愚衷、聊爲後序、云々、

に終り、直に左の一節に續いて居る。併しこれは前文(後序を指す)とは全く別事を記したもので、元の大德十年七月、大藏經開板の都監たる僧錄管主八が、顯密圓通成佛心要の入藏開板の事情を述べた文章である。されば湛睿は、左の如く說明を附記して居る。

ム(私)云、大元大德十年者、卽當和國德治元年也、但此是管主八之鏤板入藏流通之年代也、非性嘉之爲後序之年紀也。

卽ち右の文の終にある大德十年は顯密圓通成佛心要が大藏經に編入開板された年紀であつて、性嘉が斯書の後序を作つた年紀を示すものでは無いといふ意味である。

管主八の文章は左の通りである。

切以、藏海汪洋、深廣莫窺其涯涘、聖途坦蕩
指歸直造於根源、矧圓通顯密之要門極性相
有空之至理、惟機明者斯問津焉、管主八　緣幸
釋流、慶逢
聖世、聲教熾焰、佛法莫盛於當今、車書混

同、華笠咸歸於至化、眷此靈塵之寶、奚其韞
櫝之緘、敬鐫刻於斯文、俾流通而入藏、恭願　法
輪大轉、億萬年睿算、永祝
帝齡、
佛日高懸、一大事因緣俱明本智、文英武烈、子孝臣
忠、干戈息於八方、風雨調於六合、功能最勝、筆舌奚
殫、恩有普資、自他俱利者。

皆大元大德十年歳次丙午七月十五日、主緣刊大藏經僧錄管主八　謹題。

以上の記述に依ると、顯密圓通成佛心要は大藏に編入されて、元の大德十年に開板された。夫れを入唐した道眼が歸朝に際し、一切經と共に將來したといふのである。「適感得此書印本、同亦渡之」と湛睿のいつて居るのは、明に一切經と顯密圓通成佛心要とは別物と觀たものと解せらるゝが、斯くては管主八の文とは一致せぬ。それはとにかく道眼が將來した一切經は管主八の都監開板した元板の一切經である事が分る。而して、これは非常に興味ある事實であるに、道眼の何宗の人であるか、その入宋や歸朝の年紀、將來の一切經の種類は少しも分らなかつた。それが今此の史料に依つて、道眼は禪僧であること、その入宋と歸朝は延慶二年であること、將來した一切經は元板（大德年中管主八の都監開板した）であることが明かになつた。但、「延慶二年己酉比、有入唐之禪侶、名道眼房、奉渡一切經之時」といふ一節は明瞭を闕く點がないでもないが、延慶二年に入宋し、同年に歸朝したと考へても差支が無い。或は入宋、歸朝何れかの年としても、餘り永い在唐(宋)ではなかつたかも知れぬ。

三

隆寬の散善義問答の零冊がある。大奉書のやうな大きさの料紙に兩面に無造作に寫したもので、バラ〳〵になつて居るが、現に五十七八葉を存して居る。半葉十一二行、一行二十四五字であるから、可なりのものである。貞應元年、隆寬の眞本に依り、六波羅密寺に於いて、智慶が寫したものである。內容は問答體に爲つて居て、論草風である。

己上回向發願心問答訖。一校了。

老愚沙門隆寬。

貞應元年四月廿五日、賜長樂寺律師御房御眞本、於六波羅密寺
內念佛行人生願房房中、未時爲興隆佛法利益衆生、
如形寫之了。　執筆智慶。
斯書は紙葉錯亂し、一括して保存してあるから、入念に順序を正さねばならぬ、今一枚一枚調べたところに依り、史
料と爲るべきものをあるが儘に列擧すれば、左の如きものがある。
已上、上品下生、幷口讃、料簡訖。（以上一個處）
七旬愚老隆寬。
承久二年六月下旬比、重加料簡了。（同　上）
同聽刑部阿闍梨敬日、阿日、實誠等也。（同　上）
以上、上品中生料簡訖。
七旬愚老隆寬。（同　上）
已上、三福差別義意問答訖。一校。（同　上）
散善義問答第二。（同　上）
以上、第十四觀文、十一門料簡訖。
愚老隆寬。（同　上）
散善義問答第三。
上品上生位中（同　上）
以上、第二深心問答訖。　隆寬記之。（同　上）
散善義問答第六上品上生第五門ヨリ至第十一門。　散善義問答第七就上品中生。（同　上）
散善義問答第八就上品下生。　散善義問答第九就中品上生。（同　上）
散善義問答第六上品上生。　散善義問答第十就中品中生。（同　上）
已上、上品上生中、十一門料簡訖。一校了。
散善義問答第七。　老愚隆寬。（同　上）

已上、上品中生料簡訖。一校了。

七旬愚老隆寛。（同上）

四

隆寛筆といふもの數種を觀る。

具三心義は上下二帖、薄手の鳥ノ子に寫す。一葉十行十七字あり。上卷墨附二十六枚、下卷同二十一枚。極樂淨土宗義卷下は七行二十字、彌陀本願義は卷一より卷四まで四帖、七行二十五六字、三種とも同一人の筆にして、料紙も一種である。文字はとりたてゝいふ程の特徴無く、鎌倉時代に行はれた普通の書風である。一が隆寛の筆ならば、三種とも隆寛となり、一が隆寛筆に非ずと決定すれば、他の二種も隆寛筆にあらざる事と爲る。此點は未だ論じた人がないやうであるから、其の點から一應の研究を試みる。

具三心義は至誠心、深心、廻向發願心の三義に就いて述べたもので、上卷に至誠心、下卷に深心と廻向發願心の事が書かれてある。卷首に、

竊以、三心具足之正行五劫思惟之本懷也、願往生人敢勿等閑矣、今謹案和尚解釋、卽有其三義。

とて、第一に總じて三心の義を明し、第二に別して三心の義を明し、第三に總じて三心の義を結ぶとあり。而して、上卷の終に、

具三心義上卷　　權律師隆寛記之。

下卷の終に、左の總結の文がある。

夫往生極樂業以念佛爲本、唱彌陀名、名爲念佛、今此念佛必具三心、若少一心卽不得生因、茲就善導解、殊加料簡、顯佛願量、備行者要、分爲兩卷、號曰具三心義、淨土宗後輩權律師隆寛敬白。

極樂淨土宗義　下卷

大文第三、總結淨土宗義。

とあり、第三以下が殘つて居る。而して、總結の文は、一に國土の相を結び、二に往生の機を結び、三に一宗の名義を結ぶの三段に分れて居り、最後の一節に、左の如き隆寬の述懷が記してある。

就中、隆寬昔住楞嚴院、忝酌彼遺流、今雖入淨土一門、所仰專在惠心古風、然惠心稟慈惠、師資義趣定以無違歟、而今忽拜此尺、且悅往緣、且溺感淚而已。

彌陀本願義は一、二、三、四の四帖あり。七行二十五六字。第一は卷尾を闕くが、他の三帖は完本である。又別に一部の復寫本があつて、その第四の奥書に、長文の奥書がある。內容は奇瑞の記であるが、その終の方に、

貞應三年五月六日、於康樂寺草口(庵カ)、以長樂寺御本願義寫之畢、願以書寫功口(德カ)、往生極樂、敬白。

三部職位厭苦欣求淨土比丘慈圓卅五廿三記之。

尙此の奥書の初に「本大云」などあつて、無學の輩の筆と見え、文章甚だ拙劣である。

以上、隆寬筆と稱する三種(金澤文庫にある隆寬筆の全部)に就いて大要を述べたが、愈此等が隆寬の筆であるかどうかといふ事は、今はそういふ準備がないので、覽たゞけのところで判斷せねばならぬ。夫に就いて、參照すべきは、具三心義下卷の奥書である。これは本文と一筆である。

建保四年二月十三日、手自一校訖。

權律師隆寬記之。

山城宇治群是野鄕如形點了。

宇治郡の郡が群に作つてあるが、これは郡群通用と觀ることが出來るので、さして問題でない。又是といふ字は岡でなくてはならぬ。宇治郡には岡野鄕はあるが、是野鄕はない。此字は一見是といふ字に見えるが、よくみると、岡といふ字を罡に作り、夫を尙訛つて、罡に作つたものである。最後の一畫をはねることは此時代に行はれた筆癖で、例へば匠を近に作る事は寫本板本共に觀るところである。してみれば、これを罡字と觀て差支が無い。併し此に最も問題と爲るのは、全體を通じて、筆意が如何にも若々しく、頽齡の隆寬の筆とは思はれぬ事である。要するに、右の三種は隆寬の眞筆であるやうに喧傳されて居るが、純粹な學問上の見地からは、今一應の嚴密なる檢討を經ねばならぬものと思惟する。

覺明のものも覽たいと思つたが、直筆はないといふことである。

宋朝の開板に係る華嚴、天台、戒律の本は大分ある。併し世に類本が無いものは少い。華嚴と戒律は東大、西大、招提等南都の諸寺に澤山あるし、華嚴も亦東大寺に少々ある。戒律關係のもので面白いのは、折經の一帖、關中創立戒壇圖經卷尾の殘闕の中に、左の刊記のあるものであらう。それには、日本僧の明元が勸緣して、同國の定俊施財開板し、閒慶元年九月摺寫回國した事が述べられてある。

日本比丘明元勸緣彼鄉比丘定俊捨財刊板

仍印回國所冀洪廣宗乘流通正化律風遐扇

佛日增光開慶改元重陽日湖心住山比丘行居謹誌

恐らくは南宋の都杭州に於ける開板であらう。いろ〳〵律宗の系譜を調べたが、何分こゝでは資料が乏しく、律僧明元の傳歷は分らなかつた。さるにても蠹餘の墜簡の中から、而も斯一葉が現はれて、數百歲の後、その名の再び世に出づるは、宿世の因緣か、はた又積善の餘慶か、明元の喜び想ふ可し。

天台關係の宋板は、四明十義書、岳閣梨雪謗書、法智遺編止疑書、刪定止觀の殘葉が藏せられてあるが、同じく殘葉ながら、最も珍しいのは

重編天台諸文類聚　卷一、二、三、四、五、六、九、十　殘闕

である。こは南宋板で、終に「丹丘王庸刀」と刻字があるが、刊行の年月は見えぬ。最もバラ〳〵になつた殘闕を束ねてあるから、もとはあつたかも知れぬが、現在の狀態では分明せぬのである。四明沙門釋如吉の編で、表紙に「湛睿」の墨書があり、その手澤本たることを示して居る。

斯書は謂はゆる蝴蝶裝で、書史學者に珍重せられて居るが、われらは佛教々學の上から、四明天台の遺編であり、台宗の類別彙編の一書として、中には佚文もあらうといふので、大に注目して研究すべきものと考ゆる。卷首の殘つて居るものには標目があるが、夫れの闕けて居るものは、內容を調べる外は無い。卽ち標目のあるのは、卷二の諸文經疏類、卷四の諸文壽量類、卷六の諸文教證類、卷九の諸文二空類、卷十の諸文習氣類である。他卷の內容も大體調べたけれども、今は繁に亘るから略する。

四明十義書など、山家山外の諍論に關する宋刊の舊槧は聖一國師の將來本があり、夫れには普門院の藏書印(朱印)が踏され、世に喧傳して居るが、未だ斯書の存するを聞かぬ。眞に天下の孤本で、われらは南宋文化の餘香を偲んで、六百年の古賢を想ふの念に堪へぬ。

寧樂の刊經のかず〳〵は前にも紹介したが、こゝに圖らずも、その開板目錄の出た事は、書史學上大變な事といはねばならぬ。由來舊槧本の書目は高野板に具はつて居たのみであつたが、此に寧樂の方も東大寺だけではあるが、左の如く、豐富なもので、「形木」と題する一紙に記されてある。

華嚴宗形木滿足分

五教章上中下　還源觀

禪源詮上下　原人論

大疏一上　抄一上下　同二上下　同三上下

同四上　起信論　同疏下

圓覺注疏一　三　四　五　六　七　八　同略抄　一　四

六　七　九　十　十二　八

同形木欠分

演義鈔四下第二欠第三板　起信疏上第十八欠板

圓覺注疏二第五欠板　同略抄二板一枚在之余ハ欠　三第十一板マヽテ在之

五第十三欠板十二板　十一第十二第六欠　第十一第八　第七

法界觀第四板第五欠　小行願品第四欠板　大行願品第三欠板

孟蘭盆疏九枚內第一四五八ハ在之第二三六七九欠

同記十二枚內第十一板欠

同會古通今記少々在之

日は漸く傾きかけた。

從來知られて居たものに比すれば、實に豐富である。尙古鈔本の裏に使つてある文書の中に、探玄記の開板を喜ぶ事、大疏玄談や拾遺の開板が企てられた事、探玄記などの開板者たる庸鑒法橋理覺が鑒として診察の事を述べた文書が出た。これなどは珍中の珍、秘中の秘と稱すべきか。金澤文庫の墜簡、拾へば拾ふだけ面白い。

廿七日こゝ金澤へ來てから既に八日の月日がたつた。來る日も來る日も、文庫の中で、蠹餘の斷簡を調べて居れば、龍宮に往つたやうで、さつぱり月日が分らぬ。けふは國旗が立つて居るので、明治節だそうな。新聞も讀まぬ。閲書三昧に悟入して居たが、悲しや人の身の、もはや閑がないので、惜しき別れを告げねばならぬことゝなつた。龍宮からのおみやげは囊に滿ちた。いでや、京洛に歸つて、そろ〳〵開くこととしやう。

あちらの斷簡には、忍性の印があり、こちらの斷簡には圓種の印がある。金澤文庫の印影でも、鎌倉、足利のいろ〳〵、單郭重郭のさま〴〵、さては朱なる、さては黑(すみ)なる。とり〴〵の姿に、好古の心はときめく。過(すぐ)去(せ)の戒行拙くして、かゝる天上界の果報をつゞけて受けがたきぞうらみなる。

日は愈傾いた。歸らねばならぬ。殘る思ひをあとに……

さらば、かねさわの里よ。

稱名の古寺よ。

（昭和八年十一月三日、金澤にて。）

日は漸く傾きかけた。

金澤文庫に墜簡を訪ねて（下）

一

十一月三日、夕日かげろふ頃、金澤をあとに、逗子より大船に出で、國府津から眞鶴に向ふ。こゝに友人松本赴君を訪ふ。舊暦九月十五夜の滿月が相摸灘を照して居る。山河實に寂莫だ。君は稻門の出、雲舟と號し、かつて、「クォヴヂス」（何處へ往く）を譯して、洛陽の紙價を高からしめたが、選まれて町長と爲り、今防波堤の築造に熱中して居る。近來連に風外道人の遺跡顯彰に努むるなど、昔忘れぬ好漢である。

四日、快晴、風外道人の遺跡を訪ね、舟を浮べて、眞鶴の岬を回り、怪巖の亂立せるあたりに遊んで、鴎の窟に至る。鴎の窟は石橋山に敗れた賴朝の隱れたところと傳ふ。討たれた與一とその父、討つた新六との間にからまる一篇の哀話、恩讐の彼方へ遣る人間性の閃きに、六百年後のわれらも亦涙を拭ふ。

午後相携へて熱海へ往き、久しぶりにて逍遙先生を訪ふ。偶然にも路上散步中の先生に遭ふ。先生の別墅は奥まつた丘の上に在り、居ながら相摸の海が見ゆる。庭園は幽邃で、二もとの柿の大樹が大分もみぢしてゐる。雙柿舍といふ。いろ〳〵昔話に興ずる。先生齡已に古稀を過ぎ、お髭は眞つ白いが、尙矍鑠たるもので、金澤文庫のことや、先日のラヂオ放送の話から、沙翁全集修正のことに及び、四校もするが、やはり見落しがあつて困るなど語らる。辭するに臨み、自ら詠まれた柿の歌を書いて下さる。

雲舟君と旗亭に上り、晩餐を共にして居ると、大きな月が波の上に出る。十七日の月だ。「金色夜叉」の月は一月十七日だつたかなアなどゝ學生時代の話が出る。われらも亦老いたるかと顧みて憮然たること久し。金澤文庫第三回調査の時を期して袂を分つ。

二

五日歸洛以後、調査の整理にかゝつたが、容易に濟まぬ。今回は釋家に關する古文書の全部に眼を通し、本邦板經の全部と、宋槧本の一部、夫れから古鈔本のめぼしいものを調査した。

金澤文庫所藏の古文書は全部で約三千通、此の中直接釋家に關するものだけでも、一千通位はある。其の大部分は

日常往復の消息類で、而も夫れを繼合せて、裏に論草を書き、書籍を寫してある。隨つて、多くは中途から切斷され、首尾の完きものは甚だ少い。內容は交友間の問候、法要の招請、法衣の貸借、京や奈良から關東下向者の紹介狀、さては借金の依賴狀まで、さま〴〵であるが、一般文化に關係あるもの、高僧の轉住や示寂、佛寺の炎上を報じたものが最も興味を惹く。特に寧樂佛教に屬するものでは、經論の講筵、書籍の貸借に關するもの、關係のものが最も多く、禪爾、智照(凝然大德四上足の一人)、俊才、禪明房、良觀(忍性)、靈波、理覺などのものもある。その中面白いものを少々披露しやう。

首尾俱に闕け、宛名も筆者もない斷簡の中に、會解記の借用を申入れた消息がある。文中、會解記とあるは隨疏演義鈔會解記(宋觀復撰)のことで、現に完本十帖が此の文庫に遺つて居る。

大疏玄談之談義をはじめ候、貴寺御本を申請たく候、就中會解記ハ一向憑入候、是ハ早速ニはつへく候へハ本如房(湛睿)に宛てた順忍(か)の消息に、極樂寺(鎌倉)炎上の事や、就中會解記の事や、外典抄の事が見えて居る。外典鈔は弘決外典鈔のことで、現に圓種手澤の三帖本が文庫にあり、先年蘇峰子の手に依つて影印された。

抑盂蘭盆之口者極樂寺之燒失口燒候下法許候、仍點本疏記幷料口(中闕)

外典抄一弓借進候、新度末文圓林房口許に候、定被召候口(下略)

宋朝から新渡の本があると、湛睿等は直に流布本と對校することを怠らなかつた。その燃ゆるが如き攻學の精神が看取される。此頃迄は寧樂佛教もまだ活きて居る。斷簡の中に、

又一乘佛性權實論三弓同宗議房方へ令付候。

といふのがある。一乘佛性權實論(唐法寶撰)三卷は今尙此の文庫に殘つて居る。又同じく斷簡の中に、華嚴五敎章を摺寫したから、加點を請うた一紙がある。

皆以推察申候、於田舍者殊難尋書籍候間、此五敎章を令摺寫候、同者加委細之御點可下給候。

田舍に於ける學問の困難と、書籍の不十分であつたこと、當時佛書の開板が供養の爲めのみでなく、研究の必要上からも催された事がよく分る。尊い文化史の史料である。その他、大般若經の摺寫、經師、摺木、紙代、經賃の事、理趣經摺寫に關する文章もある。探玄記の開板者「庸鑒法橋」理覺の醫師たることを示す文書は左の如くである。

御札委細奉候了、彼御勞事御脉を能口とりまいらせて、委細可令申候、只御文計にてハ無左右難申、明日晝程ニ人を給候て可令參候、早旦にハ人ニ令約束候之間可罷出候、委細期參拜候、恐々謹言。

五月十五日　理覺(花押)

只御文ばかりでは申し難いから、御脉をよくとりて申さうといふ一節は、よくその醫僧たる面目を躍動せしめて居るではないか。

惠翁といふ人の消息に依れば、十王の次第に異說を注して進めた事が記してあり、宋本の列子を求めた事が述べてある。

所蒙仰候十王次第加異說令注進候、列子宋本並風土記被尋出候者、

附廻使可給候、恐惶謹言。

九月廿二日　　惠翁狀

人々御中

當時淨土教が盛んで、十王の信仰が行はれた事は、今に殘る鎌倉古寺の閻摩像でも明かであるが、奈良では白毫寺の閻摩天や司命、司祿の魁偉颯爽たるお像が博物館に安置されてある。宋本の列子とは宋槧の列子の事であらうが、斯る道教關係の新渡の本が、鎌倉から金澤あたりの武人僧徒の間に行はれたと見えて、その嗜みの程が如何にも奥ゆかしい。

抑探玄記一部開板已事給口承候、自何目出相存候、宗學僧隨喜申候、

兼又大疏玄談同又可被開之由承候、檀主御信心中〳〵難申盡候由、

院家ニも宗學侶中ニも喜被申候、付其當院家高麗本可被寫之由承候間其（下闕）

これは探玄記の開板を隨喜し、大疏玄談開板の計畫あるを聞き、斡緣者のなみ〳〵ならぬ努力を謝した消息で、恐らく東大寺尊勝院（當院家は尊勝院であらう）から、理覺に宛てたものであらう。果して然らば、當時尊勝院に、高麗板の大疏玄談のあつた事が分つて、大變面白い文書である。

その他、「依當寺炎上」云々とある極樂寺炎上の消息、「入見參可申」云々とある聖賢章に關するもの、「此間何條御事候哉」とある某家息女衣鉢を受くること、「十乘房」云々とある殺生禁斷の事、「雖然如一」云々とある關東律家の體を述するもの、「入仰候者…」とある梅尾上人行狀の事、「書絕久不入見參候」といふ六道繪の事、「一日懸御目…」の成論提縛殺の文の事、「何條御事候哉……」とある無準和尚御袈裟の事、「圓琳房來春……」とある栂尾聖教のこと、「御志も候へく候」云々の智照の狀、「日比令申入候處…」と書出した戒壇長老（禪爾の事ならん）入滅を報ずる書、「事候へ者」云々の禪爾の狀など、稀有の大事件から、日常の瑣事に至るまで、とり〴〵であるが、中には、「蒙仰候料紙」云々の紙賣の事、「當寺池の蓮…」と湛睿の書出した觀蓮の招待狀まで殘つて居る。

金澤文庫に藏する本邦の開板に係る舊槧本は相當の部數に上るので、一應眼を通すことさへ容易でない。一度に五部の求覽券では間に合はぬ。仍て熊原司書を煩はして、階上の書庫(か、る)に就いて、一々點檢した。熊原君は汗を流して、一函宛取卸して覽せてくれた。その勞は實に感謝の言葉が無い。

金澤文庫の藏書凡そ一萬卷、內整理濟のもの七千百五十八卷(冊子二千百四十八帖、卷子九百十卷、大藏經三千四百八十九帖、折本六百十一帖)であるといふが、槧本と鈔本の數は分つて居ないので、確實に知ることは出來ぬが、總數から大藏經(大部分が槧本)を除いて、殘數三千五六百の中、少くとも一千位は槧本であらう。而して折本の大部分は宋槧(その又大部分は律書)に屬するから、本邦の舊槧本は四五百と觀ても、大した誤はなからうと思ふ。

先づ華嚴經疏に三種あることが分つた。既知の正慶元年理覺の開板に係るもの〻外、似ては居るが、全く書風の異つた一下が出て來た。恐らくは東大寺板と思はる〻が、刊記のところもなく、調べる事が出來ぬ。更に又、薄い楮紙に刷つた板心を有する別種のものが現はれた。卽ち八行、二十字、四周單邊、無界で、板心に華疏一上とあり、一上と同板式のものがあり、板心には華鈔三上(外に二下と三下とがある)とある。華疏は一上、華鈔は二下、三上、三下の中殘葉が數十枚あるが、何れにも刊記は無い。料紙は和紙であるから、どう見ても、五山板系のものである。華鈔には更に同形式の而も板心の無い別種が出て來た。華嚴經疏も隨疏演義鈔も、俱に唐澄觀の撰で、澄觀は禪宗を判じて、賢首の五教中頓教に攝し、左の如く述べて居るから、斯書は禪林に於いて開板の緣なしとせぬ。さるにても、いつ如何なる寺の開板か知りたいものと思ふ。

四頓教者、但一念不生、卽名爲レ佛、不レ依二地位漸次一、而說故立爲レ頓……今乃開者頓顯絕言、別爲二一類一、離二念機一故、卽順二禪宗一。(華嚴經疏卷二)

春日板には、貞應板の般若心經幽贊と共に、同添改科の寬喜板があり、成唯識論十卷(卷子本)がある。鎌倉期の板本で部の斷簡があるが、いづれの開板とも分らぬ。

次に建長二年、石清水八幡宮で開板した佛母大孔雀明王經卷下一卷(卷子本)は珍しい。無郭無界で、別當耀淸、權當明淸の刊記がある。

此經典形木者、依有大願彫刻之、限永代
留宮寺、可爲吾神大菩薩之重寶、嫡弟權
別當法印明淸同守此願、可祈王法耀神
德、精勤之趣、偏奉仰三所冥鑒而已。
建長二年庚戌二月日

石淸水八幡宮護國寺別當法印大和尙位權大僧都耀淸

次に天台系と思はるゝものに小止觀一帖がある。(同本二部あり)六行、十七字、無郭無界、雅味ある書風を爲し、中に、

とある。修習止觀坐禪法要　　四明萬祥方祐刊

恐らく叡山系統のものであらう。料紙は和紙であるから、宋板の覆刻なるべく、修習止觀坐禪法要一卷は天台大師の撰であるから、斯の板は

眞言系のものでは、高野板の釋摩訶衍論記(聖法)の斷簡がある。粘葉本で、卷首に、「沙門聖法鈔」とある。鎌倉期の

摺寫に係るもの。

禪宗系では、黃檗傳心法要、(弘安六年壽福寺大休正念の開板か)一册、傳法正宗記(鎌倉時代の開板)零本數册があるが、

別に類本の無いものでは無い。

其の他、正嘉二年靈山寺住持宴海の開板に係る盂蘭盆經疏科分、同寺沙門寶績、如心、寂慧等が衆緣を募つて開板

した六十華嚴が數十卷あるが、此等は熊原司書が既に發表して居るから、此には略する。尙刊年刊地の十分に明かで

ない五部大乘經と思はるゝ宋板覆刻の經が澤山ある。又折本の大般若經に左の刊記を有するものが陳列してある。

大般若波羅蜜多經卷第三百五十一　化緣比丘智感　康曆二庚申三月日

沙彌尼妙春

太田大夫資長

同じ階上の陳列棚に板本の和曆斷簡が二葉出してある。何れも具注曆の上部(月日の書いてあるところ)を切斷してあ

るが、一葉の裏には墨書で祈禱の卷數(クワンズ)が寫してあり、一葉の裏には吒枳尼血脈が書かれてある。終に、

元亨二年十月廿二日書寫了　　承嚴

とある。共に鎌倉時代の板曆として珍しい。

四

宋槧本は大藏經の三千四百八十九帖の大部分が夫れで、單行としては律部が最も多い。大抵は無刊記であるが、往々刊記を有するものもある。併し此れ等は鎌倉時代に入宋した律僧に依つて將來せられたもので、奈良の諸大寺に藏するものと大同小異で、東大、招提の二大寺のものと同類である。

華嚴關係のものでは華嚴一乘教義分齊章科(師會撰)と圓覺經略注各一帖がある。共に折本で、圓覺經略注は本文大字

行十三字、注雙行二十字、上下單邊である。

天台關係のものは既記の通りであるが、因に重編天台諸文類集は卷十のみ萬字藏(第一輯第二編第六套第二冊)に收められ、卷末の刻記は無い。恐らくは寫本に據つたものであらう。

一々大藏經は折本、內容は複雜で板式必ずしも一準ならず、種々の板本が雜つて居り、剩へ寫本で補つたところもある。雜つて阿毗曇毗婆娑論卷第五十二の調査したら面白い發見もあるだらうが、何分數が多いので、中々一朝一夕の業ではない。開元寺板と東禪寺板が

福州開元禪寺住持傳法賜紫慧通大師了一謹募衆緣恭爲
今上　皇帝祝延　聖壽文武官僚資受　祿位圓成雕造
毗盧大藏經一副旹紹興戊辰閏八月　日　謹題

之れは開元寺板の一例である。又往々稱名寺住僧等の識語を存するものがある。左に出すは、鎌倉中期に居つた有名な學僧圓種の朱を以て、續高僧傳卷第十の奥に記した識語である。

弘安十年丁亥之冬十一月四日分當卷句畢、

冀以此微因、惠眼開明、紹繼佛種、晃耀法燈、滅諸含生三業之罪、顯於如來一心之性、此言誠實更非虛談、十方諸佛願悉證明、弟子圓種敬白。

外典は夙に着眼された爲に、大部分が江戸の楓山文庫に移された外、多くは散佚した。謂はゆる金澤文庫本と稱せらるゝものが夫れである。近時の影印本や近藤正齋刻するところの金澤文庫本題跋(群書治要、春秋經傳集解など)にその面影を止めて居るのは寂しい。

現に此の文庫に殘つて居る外典は、眞に墜簡といふにふさはしく、多くは蠹餘の書冊の間に雜つて佚亡の難を免れたものや、他書の書皮の下から發見された幸運なものばかりである。併しどれもこれも一葉から數葉乃至數十葉の零墨で、一卷として全きものは無い。

南史四十八、列傳三十八　一冊
春秋經傳　卷三　一葉
元氏長慶集　卷第三十七　一葉
文苑英華　一葉
玉篇　四葉

以て、如何なるものが殘つて居るかは想像が出來やうといふ。恐らく入宋僧のかたみであらう。片々たる一紙片ではあるが、又六百年前大陸交通の實際を語る好個の記念碑である。

五

鈔本は非常に多く、就中眞言の聖教が夥しい。併し夫れには手を出す事が出來なかつた。僅に圖像に關する優秀なものを一覽したばかりである。

鈔本中の學問的に貴重なものは佚書であるが、九月初訪の際に注意したものにつき、詳檢する事にした。

六帖

一、二、四、五、六の三帖と外、卷數不明の一帖の中、不明の分を精査したところ、卷三と書いた一葉が出て來たので、聊かの缺葉は免れぬが、とにかく六帖揃ふた事に爲る。撰者、鮮演の傳記に關する記事が序文の中にありそうなものと期待して居たが、他序も自序もないので、歷史的事實は一切知る事が出來ないのは遺憾である。卷首に偈があり、次に一篇の結構を述べてある。卽ち所贊の經を明さんとし、先づ能贊の疏を辨ずとて、華嚴經大疏を釋するに、三門を啓列し、初め疏の題を決擇し、次に作者を紀旌し、後本文の三段を判釋すとある。偈は左の如し。

稽首十方三世寶　毗盧文殊普賢師
願垂同躰大慈力　令我凡心合聖智
一義一言冥實際　暫聞暫見證菩提
刹塵念劫常流布　化盡群生是滿期

卷一の奥に「寫本記云」として、壽昌二年大興王寺開板の高麗板(義天續藏)から、宣和五年宋崇古寺僧安仁の傳寫した記事がある。

高麗國大興王寺壽昌二年歲次丙子奉宣雕造
大宋國崇吳古寺宣和五年癸卯歲釋安仁傳寫
淳熙歲次己酉　吳門釋祖燈科點重看時年七十二歲也

次に錄摘文解が一葉あり、終に左の識語がある。

弘安八年九月十九日、於高山寺令書寫了。
沙門

沙門の下には名が書いてない。卽ち宋國傳來の本に依り、弘安八年栂尾高山寺に於いて、沙門某の傳寫するところである。卷二の奥に右と大同小異の寫本記がある外、他の卷には寫本記も、識語も無い。各帖表紙に湛睿の二字が書いてある。

華嚴法界觀智燈疏　一帖

卷首に、修大方廣佛華嚴法界觀門智燈疏幷序、皇宋紹興府光相寺沙門釋紹元述とあり。紹元は斯書の撰者であり、序文はその自序である。華嚴法界觀門の註釋で、序文には史實の觀るべきものが無い。本文は初に題目を標擧し、二に觀主題號、三に正しく觀門を述べてある。表紙に湛睿の二字が書いてあり、華嚴僧律儀の宋本を以て寫したものに依り、曆應二年金澤稱名寺に於いて、湛睿が人をして寫しめたものである。

寫本云

建武五年十五日於高山寺妙峯山、以大唐印本書寫之、同廿五日以同唐本一校了。

華嚴宗末學律儀。

曆應二年十二月三日、於武州六浦庄金澤稱名寺、誂有人令書寫了、幷令校合了。

湛睿。

隨疏演義鈔會解記　十帖

表紙に湛睿とある事前の通りで、此れ等は何れも稱名寺三世湛睿の手澤本である。斯書卷首に、華嚴經大疏玄文隨疏演義鈔會解記、笑庵觀復撰とあり。十帖揃ふては居るが、卷二、卷九の外識語がなく、或は尾を闕いて居る。卷二の奥に左の記がある。

善住敎院住持　妙常　化到

綺峯拙叟趙希卉思施財刊此一卷寶慶三年中元日題

又卷九の奥に左の記がある。卽ち寶慶、紹定頃の宋槧本に依つて寫した本である。

善住敎院住持妙常圍施長財刊此卷流通紹定四年四月　日題

華嚴論節要　三帖

李通玄の華嚴論の節要で、高麗僧知訥が大定乙巳の秋、禪門の卽心卽佛を以て心に冥し、華嚴敎中悟入の門如何を疑ひ、後、李通玄の斯書を讀み、大に感ずるところありて、卽ち四十卷中綱要を撮り、編して三卷と爲し、門人沖湛に囑

し、工を募つて開板した旨、知訥の自序に述べてある。本論の存する以上、且つはその節要たる性質上大用なき書ではあるが、又高麗に於ける定慧雙修の風を觀る資料としての意義はあらう。原本の刊記は左の通りである。

海東曹溪山修禪社道人　冲湛
募工彫板施无窮者
同社道人　慧諶書
施主杜內道人　湛靈
各帖圓種の朱書の識語がある。

（卷一）永仁三年十二月五日再見之了。
仰之則如太山、歸之則如溟濛、昔
有何因、今値此文、歡喜信順之心
取兪頗無比物、但恨終日居自家、
未見屋裏耳、慚愧太切、爲之如何。
佛家貧人　圓種。
（卷二）再度見之了。
（卷三）永仁三年十一月十八日終當卷
點畢。　佛子　圓種。
同年十二月十八日再度刊誤之畢。
一部上中下點句了矣。

一乘佛性權實論　三帖

卷首に、大開業寺沙門法寶述と撰號がある。撰者は玄奘門下の法寶である。三乘一乘五性佛性經論同じからず、西方此土古へより今に及んで、執見各異り、皆自れを是とし、他を非として居る。今寡聞を以て略權實を述ぶるが、未だ敢て定准とせぬ。請ふ諸德其可不を詳にせよといふ趣意で、三卷に亘りて述べてある。而して、上卷に略述綱要章第一、敎時前後章第二(三枚ありて卷尾闕く、從つて第三、第四の兩章を闕く)中卷に一乘顯密章第五、佛性同異章第六、破法爾五(性)章第七、下卷に增壽變易章第八、對妄通經(章)第九、釋外執難章第十を收めてあるが、何れも「沙門法寶述」とのみありて、大開業寺の文字はない。識語は無いが、表紙に湛睿とあり、その手澤本である。

斯書と一乘佛性究竟論との同異如何といふに、石山寺に古鈔四帖(第一、二、四、五)あり。又萬字藏の續に卷三を收めてあるが、內容は藏經がなかつたので、一々對校する

ことが出來なかつたが、章名から考へても同一で、唯調巻の差に依つて、或は上中下の三巻と爲り、或はたものと思はれる。卽ち續藏本の巻三には、一乘顯密章第六、佛性同異章第七の二章を収めて、斯本の巻當り、石山本の巻四には破法爾五性章第八が首にあり、斯本の巻中の後部に當るから大體の見當はつく譯である。

支那日本撰述の古鈔本は澤山あるが、就中華嚴宗關係のものが多く、一々擧ぐる遑が無い。次に天台宗に關するものでは、弘決外典鈔と傳述一心戒文が代表的のものである。前者は普く世に知られて居るから略し、後者に就いて一言しやう。

傳述一心戒文は靑い表紙の大本で、上中下三帖、大分破爛して居る。上巻は文保二年七月十七日叡山神藏寺に於いて、北谷成乘阿闍梨義源の點本を以て、祐圓の寫したもので、(上巻識語) 中下二帖は祐圓の本から後人の復寫したものである。下巻の奥に「本云」として祐圓の識語を寫してあるが、夫れに依ると、もと上中二帖は祐圓自ら書寫し、下卷は方丈より傳領したとある。とにかく傳述一心戒文の古鈔として校勘の料と爲(す)べき本である。

次に禪宗に關するものも少々ある。達磨の撰といふ破相論や悟性論が夫れで、共に鎌倉時代の鈔本である。

尙觀心破相論一帖は粘葉、六行十七字、建長四年の識語を有する。

建長四年六月廿四日未時書了。執筆夜叉王丸。

悟性論一帖も粘葉、七行十七字、文永十一年の識語がある。

文永十一年甲戌二月廿五日、於足利庄法樂寺書寫了。

道元禪師の正法眼藏の零本や、「永仁五年八月四日酉時了」といふ識語のある粘葉の見性成佛義といふ假名交り問答體の法語がある。撰者の名は見えぬ。

六

論草講義の類も相當にある。やはり華嚴宗に關するものが多い。湛睿の起信論敎理鈔の拾遺や、演義鈔纂釋の拾遺は巻子本が殆んど一葉宛バラ〳〵に爲つて、目下の狀態では覽るにさへ困難である。先づ東大寺系のものでは、

華嚴五敎章要文集　殘闕　三帖
華嚴孔目章述草　第六　一帖
華嚴法華同異略集　上　一帖

があり、何れも問答體で、中には塗抹した草藁らしきものもあり。又何れも表紙に湛睿の署名があり、その手澤本である。外に華嚴宗香薰抄の大本が二帖(巻五と巻末詳のもの)あり。各帖の奥に、建治元年笠置寺般若院に於いて抄したる。

旨、宗性の山鳥の尾の長々しい例の識語がある。但し復寫本である。

栂尾系では、高辨(明惠上人)の撰述に關する門下の人たちの講義の筆錄が殘つて居る。卽ち修禪觀照入解脫門義の聽衆記と、華嚴信種義の聞集記が夫れである。

解脫門義聽衆記は十帖あり、表紙に湛睿と墨書してあるが、今夫れ等に依つて考へると、貞應三年六月十八日、高山寺禪河院に於いて、一々擧ぐることは出來ぬが、明惠上人に對して斯書を讀み、嘉祿二年四月四日、再び之れを讀み、以上二個度の記と林師の記などに就いて、高信が類聚し、寬元々年十月、同二年二月、同三年正月、二月、四月、丹州神尾山寺に於いて類聚書寫し寶治元年五月前後十二年を經て、同寺に於いて記し了り、同年九月高山寺禪河院にて淸書し、翌十月同院にて切句したものである。されば嘉禎二年頃から着手したものと見える。編者高信は高辨の上足であるが、建長三年九月開田院智法房阿闍梨の坊舍に於いて斯書を談じ、建長五年正月十五日神尾山北谷遺敎臺之禪菴、類聚記之、依有種々違緣、首尾遂十二ヶ年了、病體于今存、終其功、可悅、可哀矣。

寶治元年丁未五月十日晩陰、於丹洲

又云く、

寶治元年九月十三日酉終、於高山寺禪河院、如形淸書了。于時明月漸照窓前、光觀彌明室中矣。

先師遺法非人高信。

終に述懷して云く、

弘長三年癸亥十一月廿八日、

於神尾山遺敎臺重談了。

臥病床五年、大略爲最後歟。

沙門高信七十一。

ある。外に華嚴宗香薰抄の大本が二帖(卷五と卷末詳のもの)あり。各帖の奥に、建治元年笠置寺般若院に於いて抄した

斯書は高信の原本から復寫した本である。

信種義聞集記は粘葉本で四帖あり、巻二のみ表紙があり(巻尾闕く)他の三帖は首尾倶に闕けた殘簡である。右の表紙に「信種義聞集記第二」と中央に書し、左の下に、右と同筆で「智照之」と記してあるから智照の寫本である。智照は凝然門下の上足で、起信論義記の開板者である。又右の下に「傳領湛睿」と墨書があるから、湛睿の手澤本たる事が分る。内容は前者と同じく、假名交り文で釋してある。識語がないからその成立の事情は明かで無い。

以上の外、假名交りの善財童子華嚴緣起(巻首闕けて題無し、假に斯く名づけてある)一巻は鎌倉時代の鈔本、湛睿手澤の明儒願文集(粘葉)は資實朝臣作の顯徳院一日一切經願文、同御逆修願文、爲長卿作の同結願、同諷誦文、法性寺殿阿彌陀經供養願文と、爲長卿逆修願文(自作)を集めた一帖で、亦史料とするに足る。

今度の調査は先づ逸出し、ついで和書が逸出し、殘つたものは極めて僅少であるが、中には有名な文選(十九巻今に殘る)以下立派なものもある。

漢籍では先づ何といつても文選が王で、平安初期のものといはれる。次に、集七十二家相書巻下(粘葉)、某書の注疏外典は漢籍が先づざつと上述の如きものであるが、終に外典に關するものに就いて、書目だけなりと擧げて置かう。(易、老子、論語などを引用する)殘闕(巻子)本朝文粹など、何れも鎌倉時代の古鈔である。併し最も興あるものは卜華書巻第廿三の殘闕(巻子)で、内容は吉凶禍福を說いた道教風の支那撰述であるが、巻尾に龍字と覺しき篆文陽刻の方印が踏してあり、巻軸のところに使つた故紙に、墨くろ〴〵と「授菩薩戒儀妙樂」の題簽が半ば殘つて居り、筆力勁健いかにも唐鈔の面影を止め、その又傍に巨大な陽文の方印が半ば陰々として「官印」の二大字を殘し、如何にも臺閣の氣分が漂ふて居る。龍字(か)の篆文方印は石山寺所藏針間國智識造の大智度論に踏すものと同一である。又本文の文字も重厚で出色の殘巻である。

和書もいろ〳〵あるが、めぼしいものは、今鏡、吾妻鏡など史書の殘闕、詠五十首和歌、和歌詠草、片假名古今集、連歌百韻など、和歌や連歌に關するもの、此れ等は何れも鎌倉時代の鈔本で、國語國文の研究上資するところが少くあるまい。應長二年と弘安十一年の假名曆も亦珍らしいものゝ一、裏には聲明の古譜が書かれてあるのもゆかしい。

七

金澤文庫の藏書を通じて、鎌倉に於ける僧侶武人の生活を想ふ。

稱名寺の創立は明かでないが、關東往還記に、鎌倉を去る幾ばくもなく一寺あり、稱名寺と號す。年來不斷念佛衆を置くと雖も、已に停止せしめ畢んぬといふ記事がある。仍て弘長二年以前から存在した事は明かである。稱名寺と

いふ名からしで、念佛に關係があり、鎌倉に於ける極樂寺、光明寺などゝ共に、念佛の道場であつたと見える。開山は妙性房審海、二世は明忍房劍阿、三世は本如房湛睿で、鎌倉の中期には圓種といふ學僧も住し、宋槧大藏に識語を殘して居る。

本如房湛睿は禪爾の弟子で、禪爾は東大寺凝然の上足である。湛睿はかつて泉州久米多寺に住し、後鎌倉に下り、稱名寺に住した。爾來南都の學僧が頻繁に往來し、靈波、志玉等も此に居つたといひ、又、文書記錄の上から研究すれば、智照、叡尊、忍性等も此に往來したやうである。されば南都佛教の中、東大、西大兩寺の影響が此に波及して、一種の小南都を現出して居る。

此の頃の南都佛教は內容極めて複雜で、凝然一派の學風は華嚴と律を雙修するは勿論、更に眞言と淨土とを兼ねて居る。凝然自ら稱して、「華嚴兼律欣淨金剛沙門」といふ。以てその一斑が察せらるゝ。卽ち華嚴、戒律、念佛、眞言四宗兼學であり、戒律と眞言とを兼修し、持戒の關係から念佛に對して同情を有たなかつたばかりである。

斯る雙修兼學風の佛教は、本邦では旣に寧樂朝に萠し、支那では唐の中葉早くその徵を觀る。華嚴に就いていへば、澄觀、宗密旣に教禪一致の說を立て、律に就いていへば、南宋杭州の元照正しく律と念佛を雙修して居る。鎌倉以後の南都佛教は遠く觀密二師の學風を承け、近く元照の影響を蒙つて居る。されば、華嚴、戒律、念佛、眞言の外、更に禪の匂ひを加味せる譯である。此の文庫に、華嚴や律に關する南宋槧本の豐富なる所以が察せられやう。剩へ、西湖の天台學は遵式等を中心として、又念佛の風を帶びて居る。從つて、四明天台に關する宋槧の殘簡を止むることも因より然るべき理由がある。

飜て、鎌倉に於ける佛教の興隆を觀るに、榮西に依り夙に臨濟禪の傳來を觀、壽福、淨妙二寺の建立となり、北條氏に至りて、建長、圓覺の二大伽藍の造營と、道隆、祖元二禪師の來朝があり、その他、普寧、正念、降つて一山に至るまで、宋元の名僧續々として來化したので、淨智寺を加へて、謂はゆる鎌倉五山の併立を觀るに至つたのみならず、東福の辯圓、曹洞の道元も亦飛錫して、鎌倉の禪宗は一時に生色を呈し、武人の間に直指單傳の宗風が大に競ふて居る。

念佛宗は初め禁制されたが、後には大に榮え、隆寬の配流せられて相摸飯山に滯在した外、良忠は光明寺に居り、東國念佛の中心と爲り、極樂、稱名等の諸寺皆念佛を唱へたのである。一方凝然は覺明に觀經を聽き、湛睿はその師叡尊奈孫に當るから、隆寬、覺明の著述が此の寺に殘るも亦當然である。他方、忍性は極樂寺に律幢を飜し、その良より下向して、戒を說いたのであるから、禪、念佛、戒律の各宗が民心を風靡した。

斯る學風の下に置かれた僧侶の精神生活、延いて、夫れ等の感化の下にあつた武人の內生活のいかなるものであつ

たかは察するに餘りある。又宋との交通に依つて、南宋の文化が直接に影響を及ぼし、或は京都や南都を通じて、その餘波を擧げて居る。從つて新渡の宋槧は僧俗に依つて爭ふて講讀され、經典、註疏は申すに及ばず、儒書、道書から、詩文雜籍に至るまで、新しい氣分を知識階級の書齋に放散した。現に文庫に、南史、文苑英華、春秋集傳、長慶集、玉篇等の殘簡を傳ふるに依つても、その盛觀が察せらるゝである。

斯る文化の背景から眺めると、謂はゆる關東武人なるものが決して武骨一偏の野人でなかつた事が了解さるゝであらう。宗教上の修養に於いて、經學、文學など、經世の學、情操の訓育に於いて、或は十分に、或は相當の程度に、教育せられたであらう事は歷然として指摘する事が出來る。例へば、金槐集の著者(實朝)が決して單なる上方公卿の感化に依つて現はれたのでなく、實時、顯時、貞顯等の金澤氏の代表的人物が、或は群書治要を講じ、或は圓覺經を書寫供養するなど、その基くところの遠くして深きものあるを知らねばならぬ。而して夫れ等武人の敎育に當つたものは、當時の高僧であり、名僧であつた事を想ふ時、われらは「羅馬は一日にして成らず」の感が深い。

われらは吾妻鏡を讀んで、寶治元年六月五日の條に至り、三浦一族滅亡の記事に接して、更に斯感を深うする。事窮るや、泰村以下宗たる輩二百七十六人、故右大將(賴朝)の法花堂に籠り、繪像御影の御前に集り、或は往事を談じ、或は最後の述懷に及ぶ。西阿は日ごろ念佛の行者なれば、諸衆を勸請し、一佛淨土の因を欣ばんが爲に、法事讃を行じて廻向する。此時光村調聲と爲る云々と記してある。その最期の何ぞ哀切なるや。われらは悲壯なる文字の裏に、關東武人平素の信仰を觀る。

今此の文庫の階上に、貞顯が父の遺札をすき返して、その供養の爲に、謹寫した大方廣圓覺修多羅了義經二卷が展開されてある。圓覺は分通華嚴といはれる經典で、華禪兩宗に用ひられ、宋朝士人の間に流行したものである。斯る經卷を通じて、貞顯の精神生活が髣髴して、六百年後のわれらは彼等上流武人の風懷を想ふの念に堪へぬ。

たとへ斷簡にせよ、零墨にせよ、當代の僧侶、武人の精神生活の豐富さを物語るもの、金澤文庫に如くものがあらうか。われらが此の南宋敎學の縮圖といふべく、關東武人の記念碑ともいふべき、小博物館を訪ふて、埋もれた文化の復原にいそしむ事は、誠に衷心よりの歡喜である。

(昭和八年十一月十八日、京都に於いて稿了。)

黄落の秋

三たび金澤文庫を訪ふ

一

都大路にたち並ぶ街路樹の枝々に滿つる銀杏のわくらば、朝たの風に散り、夕べの風に飛び、全く生氣を失うて、唯一しぐれを待つばかりの運命、忍び寄る冬の足どりに、戰きさゞやくわびしさ、夫れ艸木黄落して、秋のゆくへをいづくにか訪ねん。われらは東國の寂しき町の金澤文庫に、三たび墜簡を拾ふ。

×　×　×　×　×

『金澤遺文』の編輯を發願したのは、第二回採訪の時であつた。今や機熟して、余と助手、寫眞技師井上君とその助手との一行四名は、十一月廿一日の夜十一時三十分京都發にて金澤に向ふ。夥しい機械を積込むのは一仕事である。便利堂の店員五六名來つて手傳ふ。夜半の事なれば、直に寢臺に入つて、夢は關東に走る。

翌朝六時十三分靜岡着、夫れより曉の空は刻々に紅くなり、快晴の樣子なるは何より辱し。沼津、國府津あたり、三分の新しい雪を冠つた不二山が東海の微光を沿びて車窓に輝く、久濶の靈山に對して眠り全く醒む。村々の森には黄褐色と爲つた落葉樹が僅に晩秋の名殘を留めて居る。

九時三十幾分横濱下車、例に依つて湘南電車に乘る。圓覺寺の舍利殿を想はせる弘明寺の茅葺の高い家根が、黄盡した銀杏の大樹を背景にして立つて居るのは、何となく星月夜鎌倉情緒ともいふべき頽廢的氣分をそゝる。

金澤文庫驛からタクシーを驅り、やがて稱名寺に着く。境內七八本の銀杏は殆んど裸と爲り、僅に文庫の入口と、側面に池を見下して居る二大樹だけが半身の黄葉を殘して居る。而して唯見る、滿地の落葉悉く黄金、足踏み入るゝ餘地もない。

間もなく撮影庶務係の安谷君が東京から來る。此に全員部署に就き、文庫の隣地にある昭和塾の一室に機械を据附け、反射燈を點して、毎日朝の八時過ぎから、夜の七時八時頃迄、撮影に從事する（余と助手は小松屋に、井上君等二人は昭和塾に宿泊、安谷君は東京から通勤することゝなる。）立つたり居たりして指圖すれば、肩は凝り、脚は棒のやうに爲り、中々樂なことではない。時には文庫の方で材料の典

籍や文書がめつからなかつたり、異議が起つたりする。驅けつけて協議したり、懇談したりせねばならぬせわしさ、圖錄の作成なんかは、レンズを据ゑてさへ置けば、向ふから本や文書が飛び込んで來るやうに思つて居る人もあらうが、中々以てそんななまやさしい事ではない。時には夕飯さへ八時九時になる。而も全員の完全な協力に依つて、凡そ一週間に、四つ切概算三百枚を完成したのは成功といはねばなるまい。余は衷心より文庫當局の寛容と、全員の寢食を忘れた努力を感謝する。

斯やうなせわしい間にも、前回めつからなかつた珍しい資料や、氣づかなかつた文書が出たりして、その折々の心を慰めてくれる。今主なるものを少し書いて見やう。

二

古文書はその裏を飜して、書籍や論草、聖教の類を寫したものが多いので、文庫當局で一度解き放して、謄寫した後は、舊に復して綴ぢ込んだものも多いため、こちらの希望するものゝ中に、もはや再び觀る事を得なかつたものが隨分多かつた。併し一枚宛裏うちした分は撮影するに差支へはなかつた。夫れ等の中に面白いものもある。

最も興味を惹くのは念佛の祖師善導大師を祭つた表白文である。「日本國眞宗道俗等敬て香花茶藥蔬食の饌を備へ、跪て第三祖師善導和尙の靈に献ず」と書き出した、當齋忌日伸追遠文が夫れである。これは年號も場所もないので、いつどこでの事か明かでないが、恐らくは稱名寺あたりで、隆寛、覺明一派の人々か、或は湛睿等に依つて行はれた善導忌の表白文であらう。とにかく、鎌倉に於ける淨土敎の興隆を考ふるに屈强な史料であるから、左に原文のまゝ全文を出さう。（古體の假名は今體に改む）

當齋忌日伸追遠文

日本國眞宗道俗等、敬備香花茶藥蔬食之饌、跪献第三祖師善導和尙靈、伏惟和尙者彌陀如來之化身、曇鸞法師之孫弟也、入三昧以觀淨土之樓閣、建專修以作苦海之津梁、佛法東行以降獨聞盛德之在身、神識西遷之後、遂標光明之出口無間無餘之行、玄素靡風、百卽百生之蹤、文簿點露、誠知昔則化導被李唐、今亦利益徧華夏、念佛之輩孰不欣戴、爰弟

子等宿縁之所追、暮齢而承業、謬列異域之
末弟、忝期同土之託生、進酌藍溪之遺流、雖恥
智分之淺、退思華池之拾謁、猶致函丈儼縱、
碎身紛骨、豈答昵報謝乎、因禮寫眞之影、偸抽
運志之誠、謹迎忌辰、供以薄奠、伏願和尚尊靈
且驚此宗之衆祖、且率彼界之賢聖、降臨道場、
必垂納饗、弟子等不任歸命之至、謹疏。

念佛に關しては、本紙は逸しては居るが、飯山觀堂より沙門智藏が本如上人湛睿に送つた消息のかけ紙のみ一葉殘つて居る。飯山は相摸の飯山で、隆寬の配所であり、その飯山と稱名寺との關係を知る上に於いて興味ある殘簡である。

節に云く、

倉にても居つたから、恐らくは稱名寺での出來事であらう。文長く且つ前半の下部爛脫甚しいから此に出さぬ。終の一

祭文としては、應長二年三月、釋智照等の清凉大師澄觀を祭つたものが殘つて居る。智照は凝然の弟子であり、鎌

蓋去賢首大師一百餘歲、玄宗重隆、計弘法弟子三十八人、遺教未絕、方今智照等問津、將欲涉水、揭流何不討源、
各凝如在之思、等報遠霑之恩、嗚呼哀哉、伏惟尚饗。

三

當時文化普及し、鎌倉は東國の首府として、遙に京洛と拮抗した。隨つて、僧徒の文藝に關する逸事も少くない。本邦最古の連歌といはれる百韻は稱名寺の阿彌陀堂などで行はれた詠草が文庫に殘つて居る。文書の殘簡の中には往々に詩が書かれてある。左に稱名寺二世明忍房劒阿の遺篇を示さう。

弘安作噐之曆、孟陽敦祥之天、被控黃鳥
之雅韻、臻茲勝形、被催徃因之善苗、詣此
梵宮、于時鴈塔高聳、而霞埋金鏤之晃、
香煙細昇、而雲雜鬘鬟之膚、加之、佛閣是
淺草恒向三春之候、本尊觀音則纔留一片之
霞、故弘誓海漫々遙浮慈悲之船筏、大
悲之淚漣々普灑四生之煩惱、是以殘等

覺一轉之夢、廣憐忍土之含識　待智光圓
滿之曉、遠期無拭之金邦者也、爰撲懸望於
悲願崕、仰馮平等之誓、催興於寶樹之霞、
恐述暗陋之緒、云爾。

三寶院末資金剛佛子劒阿

吹曖南汙淺草綠　玄陰漸徒去何之
蕭臺霞聳韶光斜　露地霜銷草縷滋
湖寺鐘聲驚曉夢　洞房磬響增霄悲
羨禁槃礴難動憂　再詣慈眼芳育墀

王朝風の詠み方で、餘り傑れたりとも見えぬが、古事記神代卷を以て有名な劒阿の文藻としては珍とすべきであらう。劒阿は筆力雄健で、殊に梵字の署名は筆勢躍動の趣きがあり、尋常一樣の凡僧でなかつた事を示す。假名かきの消息を飜して、立派な鳥の子の裏に寫した聲明の譜が少からず殘つて居るが、彼れの寫したものは特にすぐれて居る。彼れは密教事相に達したのみでなく、兩部神道の蘊奥を極め、更に聲明の達人として、聲明源流記にその名を留めて居る。類聚集の奥に、聲明に關する自己の經歷を叙して云く、

延慶二年八月三日、以勝蓮上人
秘本點寫傳受畢。於此一卷者、
東南一流之秘曲、韻律一道之肝心
也、予自去建治弘安之曆、至于德治延
慶之比、首尾三十余年之間、顯密
二道之音曲稽古經年、呂律中曲之
妙韻鑽仰積日、而顯明神感動
之曲、密諸天合掌之節、只隱
秘心府兮而未漏口外者也、今感得
此一卷、感涙與筆端交下、偏高
祖大師之憐愍、妙音大天之擁
護也、不可不信、不可不悅、仍感激
之至、任筆注馳、云爾。

その他、當時の學僧の詩が少々ある。桑門陰士能忍の七律は前記劍阿流の律詩である。

文永之年、朱明之夏、忽逢二事緣一、
始詣二此砌一、地富二風流一、人兼二仁智一、感興之
至、難レ得而稱者口口猥述二弐身之思緒一、
恣呈二三韻之拙章一而已。　桑門陰士能忍

口口(字カ)佳名經レ歳久　故仁祠德復施レ威
井泉夏到水聲冷　野徑春過花色稀
黒夜飄風俄破レ夢　青天驟雨僅霑レ衣
田畦蕭索佛庭靜　萬事凝レ誠盍庶幾
隨分理に墜ちて居る。併し又あつさりした聯もある。
春日於二稱名寺上方一言レ志　文翁
千株松老雖レ如レ舊　群樹花香不レ忘レ春
新詩か古詩か、菖蒲の七言もある。
菖蒲
五月長生五日朝　漢皇延算九疑艘
玉衡星散澗中色　朱律露滋石上粧

四

僧徒の外典研究に關する資料の一として、列子の訓釋を書いた斷簡がある。
列子序正安四―九月始レ之
とあるから、正安四年の九月から講讀を始めたものと見え、
第一
序云、然所レ明(ロス)往々(ニ)與佛經(ニ)相(ヒ)參(レリ)、大歸同(シ)於老莊(ニ)、文
の文を出し、難字に訓を施し、次に第四の商の太宰孔子に見えて聖を問ふの一段を書し、

孔子曰、西方之人有聖者焉、不治而不亂、不言而自信、不化而自行、

と暗に釋迦を指すといふ一節に及んで居るのを觀れば、如何にも僧徒らしい列子の講讀である、併し列子の此の一節は廣弘明集の初に引かれてあるから、これは廣弘明集の講讀であるかも分らぬ。

禪宗に關する斷簡の二三は、當時鎌倉に於ける禪宗興隆の片影を遺すものとして興味が饒い。例へば、相州禪門送蘭溪回書の如き、時賴から道隆に送つた書の寫しである。元應二年五月十八日に書いた約翁德儉の上皇に上る遺表、同日の遺誡、同十九日に書いた辭世の頌などは、當時の傳寫に係るものである。

遺表

□比丘某咨目百拜上覆

上皇陛下、某忝承

明詔、叨主名藍、只恨、道學疎怠、無補法門、

今風火相逼、不能參於

陛下自以拜別、伏願

上皇陛下、久保國家、恢宏祖道、是某禱祝之

□

五月十八日某頓首百拜

辭世頌

七十六年　不生不死　雲散長空　月□

□黑

元應二年五月十九日

首座大衆珍重　　約翁判

遺誡

□諸小師等

老僧掩息之後、須卜牧護菴一區茶毘了□

□幷諸余小佛事維那下火了、念誦而已□

□寧退耕入滅、雲隱用此法、老僧掩息在□

□深思慕之、今憑此故事不可背

□察之

五月十八日　判

禪僧の嚴肅なる最期が當時一般の人心に與へた影響の大なるものあると共に、他宗の間にも亦感歎された事は、湛睿に宛てた良然の消息にも、

唐人靈山長老時日
坐脫、正念終焉之躰、希代
勝事候也、（下略）

と賞讃の聲を擧げて居る。其の外、保胤の池亭記、增賀上人事、大江定基（寂昭）の事など記した斷簡や、或寺の方丈が流罪の唐人と唱和した詩を書いた零片もある。併し一般の興味を惹くものとしては、弘安三年七月十七日仙覺の注した聖教の目錄であらう。こは仙覺の直筆ではなく、正安元年經助の寫すところであるが、この仙覺は有名な萬葉集註家の仙覺であらうと思はるゝところに興味がある。

（カ）祈雨　對聞　別法
授與　軍荼　太
肝心集　雜記　[illegible]三寶院雨

此袈帋之目六、守根本被重之
次第私載之、
弘安三年七月十七日　仙覺
袈帋之表書□根本之定也
正安元年十一月九日□□之□
不令違書寫之了。
金剛弟子經助

徒然草に入宋沙門道眼の事蹟を書いた兼好に關する史料としては、その筆蹟を留むるかけ紙が二枚あり、稱名寺方丈（湛睿ならん）に宛てた卜部兼好の署名がある。さるにても、那爛陀寺を建て、首楞嚴を講じ、一切經を將來した道眼の入宋年代や、一切經の種類が、湛睿の書いた顯密圓通成佛心要の識語に依つて判明した事（金澤文庫に墜簡を訪ねての中に述べて置いた）と聯關して、いかにも不思議な因緣とやいはん。

（備考）道眼の事は徒然草に、左の如く見えて居る。
徒然草（第百七十九段）
入宋の沙門道眼上人一切經を持來して、六波羅のあたりやけ野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて那蘭陀寺と號す。其ひ

じりの申されしは、那蘭陀寺は大門北むきなりと江帥の說とて云つたへたれど、西域傳法顯傳などにも見えず、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけん覺束なし。唐土の西明寺北むき勿論なりと申き。

同　（第二百卅九段）

一、那蘭陀寺にて、道眼聖談義せしに、八災といふ事を忘れて、これやおぼえ給ふといひしを、所化みな覺えざりしに、局の內より是々にやと云ひ出したれば、いみしく感じ侍りき。

五

鈔本として、珍しいものは、圓宗文類第二十一卷の斷簡であらう。圓宗文類は第十四と第二十の二卷は夙に知られ、近年にその第一卷が朝鮮から出たが、一部二十二卷中他の卷は知られなかつた。然るに、此の文庫に第二十一卷から抄した數篇の文章が、湛睿の筆に依つて遺つて居る事が分つた。之れは誠に學界の慶事である。

別傳心法儀一卷は福唐飛山默子戒珠の撰に係り、禪宗の敎外別傳說に對し、三乘の演（のぶ）る所は唯一心なり、一心の法は敎の本なり、惡（いづくん）ぞ心外に而も復た心あらんやといつて、自說を述べたもので、本文は萬字藏（續）第壹輯第貳編第六套第貳冊に收めてあり、義天の後記もあるが、圓宗文類中の一文である事は分らなかつた。然るに湛睿は卷末に、

圓宗文類第廿一卷中載（之カ）□

と註して居る。（此鈔本には義天の後記は無い。）又誡惡勸善と勉學の二篇を寫した一帖があり、右の二文は圓宗文類第廿一卷にあるが、作者の名字が標して無いけれど、恐らく戒珠の作であらうといつて居る。湛睿の識語に云く、

右二首者載于圓宗文類第廿一卷、而不標作者名字、若是戒珠之所述歟。事爲肝要

故抄寫之、可謂書紳之明訓者乎、泛

烈（列カ）人倫之族、誰不措懷哉。

于時正和第二曆（关丑）季春盡日、於泉州久米多寺、以御經藏本敬書之。

貧道名字比丘湛睿（通十八 俗四十三）

又、佚書の一に、法藏の弟子文超撰華嚴經義鈔一部十卷中の第十卷のみが遺つて居る。斯書は一名自防遺忘集と稱し、圓宗文類第二十二卷に、

花嚴自防遺忘集十卷　唐終南山至相寺沙門釋文超（賢首門人）述

と見え、同文類に數處引用してあるが、本邦未だ流傳せざる書である。然るに中比東大寺東南院の經藏破壞の時、或人潛に彼の經藏に入り、要經等を選取した中に、此集があつたので、請ふて之れを出したのである。而も第二十六門之末後は悉く朽損して居たので、不具の書であるが、敬みて之を書すと、正和三年六月九日湛睿の記にある。（識語略す）

又卷首も卷尾も俱に闕けた傳記の殘簡がある。往生傳の類であるが、書名を知る事が出來ぬのは遺憾である。中に鎌倉時代に歿した人の傳記があり、（例へば正嘉二年十月四日滅など）又、上野國大胡小四郎秀村などいふ傳の標目が大分殘つて居る。詳檢せば得るところがあらう。今殘つて居る標目を拾うて左に出す。

第廿六　武藏國吉田鄕尼
第廿七　上野國淵名庄波志江市小中次太郎母
第廿八　同國赤堀紀內男
第廿九　同國同所縣入道
第三十　同所布須島尼　（此の間闕けて居る。）
第卅五　信濃國小田切四郎滋野遠平
第卅六　伊豆御山尼妙眞房
第三十七　武藏國阿保比丘尼
第三十八　比丘尼靑蓮　（此の間闕けて居る。）
第四十六　上野國大胡小四郎秀村
第四十七　同國細井尼
第四十八　小杉新左衞門尉國賴
第四十九　攝津國井戶庄小野左衞門親光　法名成佛

その他、新羅の元曉の大乘六情懺悔なども寫されてある。

六

舊槀の中に、文永十年四月八日、鎌倉極樂寺沙彌玄觀の開板した律部（戒品）の殘簡がある。小字で、折本六行、十七字、左の刊記を有する。

抑開二此印板一旨趣者、上爲二令法久住一、中爲下一切衆生明二智惠之法眼一、堅二持戒行之

制心、下爲先考幽儀、依當一十三年之忌景、彫四十七品之制戒、伏冀諷誦之輩、結緣之族、同出閻浮之苦域、共到親率之樂邦矣。

于時文永十年之曆、孟夏初八之日、書功訖。

相州極樂律寺少沙彌玄觀。

鎌倉極樂寺住僧の開板としては、此の外、建治元年七月忍性の盂蘭盆禮文一巻がある。(寧樂刊經史附圖34)

建治元年乙亥七月日令開之

鎌倉極樂寺沙門　忍性

折本で、四行十字、文字は比較的大である。隨つて。彼此文字や書風に於いて一致せぬ。忍性は叡尊の弟子であり、かつ當時西大寺板の續出した時代であるから、禮文も奈良に托しての開板であらうと考へたが寧樂刊經史一六九頁先之、戒品の開板ありとすれば、當時鎌倉に於ける開板の例もあれば、此れ等は鎌倉極樂寺での開板であるかも知れぬといふ考へが起る。奈良といひ、鎌倉といひ、何れも明證を闕くのみならず、此の二書の刊記では明に極樂寺での開板といふ語もなければ、更に明證の出る迄前說を留保したいと思ふ。又戒品の文字が、康元々年奈良法華寺の尼たちが開板した筆蹟である點も、奈良との親近を語るものと極めて似た筆蹟である點も、奈良との親近を語るものと史學上未知の舊槧である。

七

晩秋の金澤は晴天が少くて、雨が多かつた。時に薄い日光を見て、やれ嬉しやと思ふ間もなく、パラ〳〵と時雨が落ちて來る。日の照り雨だ。六浦に行きたい。鎌倉に遊びたいといふ一同の希望も、撮影に追はれて實現されそうにも無い。二十八日は早く切上げて、鎌倉めぐりといふ段取りであつたが、午過ぎからのむら時雨に、かてゝ加へて、木枯は吹く、木の葉は飛ぶ、冬が一時に來たやうで、仕事は山ほど殘つて居るといふ狀態、とてもどうにもならぬ。外套の襟を立てねばならぬ程の寒さ、稱名寺境內の雜木はとにもかくにも悉く黃葉して、縱橫無盡に落ち散つた狼籍ぶり、例の靑葉の楓のみが靑い枝を留めては居るものゝ、滿目の風光落莫を極むるさまは、彼の「むつら」(謠曲)の一節を想ひ起さしめる。

……夕べの空も冷じき、此古寺の夜の面、きりの籬の露深き、千草の花をかきわけて、行方もしらずなりにけり、

〳〵。

最後に貞顯が父顯時の三十三回忌に、彼の遺札を飜して、書寫供養した圓覺經二卷に就いて、題簽の文字を撮影集字し、余が秘藏する五山板禪林類聚の零冊(金澤文庫の朱印を踏す)を當文庫に寄進して、永久の記念とする。

二十八日の夕べ、撮影を了り、余と助手は先發し、技師等は機械整理の爲め、二時間程後れることゝ爲る。使さん夫妻は風流氣のある人で、構內に栽ゑた芸艸の苗を包んでトランクに入れてくれるやら、新しい銀杏の實をもつてくる。三人の子どもたちも、お馴染のおぢさんに贈るべく、山百合や黃蜀葵の黑く實つた莢を採つて來る。われら兩人は一寸宿に立寄り、橫顏を吹きなぐる木枯を衝いて、まつしぐらに文庫驛に向ふ。

小松屋の前は街道で、傍に小祠があり、境內に何百年かを經た大銀杏樹が天を劈いて立つて居る。晚秋になつても、少しも黃葉せず、その影婆娑として、いかにも凄じい。稱名寺への徃くさ還るさ、いつもその挺然たる威容を仰いだのであるが、折しも十日前後の片割月が梢を照して居る。さらばともいひたげに……

× × × × × × ×

橫濱に出で、驛の食堂で、パンに紅茶、果物のゆふげを認む。此頃はわれらにとつて、嚴重なる精進日だ。かくて、午後七時四十九分、神戶行急行に乘る。

寢臺のなかつたのは、疲れたからだに重ね〳〵の打擊に相違ないが、おかげで月夜の不二がみゆる。國府津、沼津から靜岡あたり、澄みきつた大空に、白銀の被衣を召した木華咲耶姫の出現、靈氣骨髓に泌み渡つて、恍惚の境に入る。

(昭和八年十二月廿五日、京都に於いて稿了。)
(同　九年二月二日、更に修正を加へ畢んぬ。)

金澤遺文索引

あ

足利基氏書狀　巻下、四八
阿毗曇毗婆娑論　巻上、五二

い（ゐ）

一乘佛性權實論　巻中、一〇

え（ゑ）

惠翁書狀　巻下、五四

お（を）

大佛時通書狀　巻下、五一
往生要集抄　巻中、四〇
往生要集釋　巻中、四〇
往生禮讚聞書　巻中、六八
黃檗山斷際禪師傳心法要　巻上、四二、四三

か

誡惡勸善　巻中、三四
戒品　巻上、二三
形木　巻下、二一
假名曆　巻下、一三、一四
金澤貞顯書狀　巻下、一八、四三、四六
假字入法界品　巻中、三二
漢家類聚往生傳　巻中、七七
岳閣梨雪謗書　巻上、六六、六七

き

起信論義記教理抄　巻中、二九
夾科肇論　巻上、四、五
凝然書狀　巻下、三三、三四
玉篇　巻上、七六

く

弘決外典鈔　巻中、三六、三七
俱舍論頌疏　巻上、一、二、三
俱舍七十五法名目　巻中、八、九
觀經玄義分管見鈔　巻中、五七
觀經玄義分聽聞抄　巻中、六一
觀經序分義　巻上、四一
觀經序分義管見鈔　巻中、五六
觀經序分義顯意抄　巻中、五八
觀經疏　巻上、七二

観經疏光明抄　巻中、五五
観經定善義顯意抄　巻中、五九
観經定善義見聞集　巻中、六〇
観念法門管見鈔　巻中、六五
観念法門要略記　巻中、六七
關中創立戒壇圖經　巻上、五六
關東往還記　巻下、六四、六五、六六、六七、六八
久米多寺維那書狀　巻下、三七
具三心義　巻中、四一、四二
具注曆　巻上、四九、五〇
群疑論疑芥　巻中、六九
群疑論見聞　巻中、六八
群疑論第七見聞抄　巻中、六九

け

一乘教義分齊章科　巻上、五九
一乘義分齊章義鈔　巻中、一六、
華嚴經疏　巻上、一二、一三
華嚴經探玄記　巻上、一〇、一七
華嚴經大疏玄文隨疏演義鈔會解記　巻中、二〇
華嚴經內章門雜孔目　巻中、一二
華嚴五教章要文集　巻中、三一
華嚴五十要問答　巻中、一一
華嚴論節要　巻中、二六
劍阿書狀　巻下、一九
劍阿の律詩　巻下、二九
兼好書狀懸紙　巻下、五六、五七
見性成佛義　巻中、七四
甄正論　巻上、五三
顯密圓通成佛心要集　巻中、二三、二四、二五
解脫門義聽集記　巻中、二七
元氏長慶集　巻上、八〇
玄爾書狀　巻下、三五
ネ列類聚集　巻中、八三
ネ列類聚集　巻中、八四

こ

金光明經　巻上、三五
金光明經懺悔滅罪傳　巻上、三四
極樂淨土宗義　巻中、四五
悟性論　巻中、七二

さ

西方往生傳　巻中、七八、七九

正嘆異抄　巻下、一五
聖教要文　巻中、三八
諸宗要義　巻下、一〇
釋摩訶衍論贊玄疏　巻上、一三
釋摩訶衍論贊玄疏　巻中、二八
釋摩訶衍論贊玄疏　巻下、三九
四明十義書　巻中、五二
四分律比丘尼戒本　巻上、三二
四分律注　巻中、四九
修大方廣佛華嚴法界觀門智燈疏　巻中、五四
修習止觀坐禪法要　巻中、六三
修華嚴奥旨妄盡還源觀　巻下、四二
修華嚴奥旨妄盡還源觀　巻中、四八
修華嚴奥旨妄盡還源觀　巻下、五八
修華嚴奥旨妄盡還源觀　巻中、七三
祭清涼大師文　巻下、二六、二七
貞秀書狀　巻下、四九
刪定止觀　巻上、六一
纂釋拾遺　巻中、三〇
散善義問答　巻中、四三、四四
散善顯行緣　巻中、六二

し

修華嚴奥旨妄盡還源觀　巻上、五八、巻中、一四、一五
修習止觀坐禪法要　巻上、四〇
修大方廣佛華嚴法界觀門智燈疏　巻中、一九
四分律注比丘尼戒本　巻上、二四、二五、二六
四明十義書　巻上、六二、六三、六四、六五
釋摩訶衍論記　巻上、三九
春秋集傳　巻上、七五
書狀　巻下、一六、一七、二〇、二二、三六、三九、四四、四五、五〇、五二、五三、五五、六〇
諸經伽陀要文集　巻中、八〇、八一
諸經要文伽陀集　巻中、八二
諸行本願義　巻中、四八
聖教目錄　巻下、五八
菖蒲　巻下、三二
正法眼藏　巻中、七三
稱名寺定置　巻下、一五
神號麗氣記　巻中、三八
新猿樂記　巻下、一〇
信種義聞集記　巻中、二八
十二門論宗致義疏　巻中、一三
淨土三部經大意　巻中、三九
淨土宗要肝心集　巻中、五二

す

隨求即得眞言儀軌　巻上、三二

せ

專雜二修義　巻中、四九
千手御手子細　巻下、六三
選擇集述疑　巻中、五四

そ

相州禪門送蘭溪□書　巻下、四二
僧俗贈答詩　巻中、六二
惣別二願抄　巻下、五八
宋　曆　巻上、八一
續高僧傳　巻上、五四

續座左銘　卷下、七
續本朝往生傳　卷中、七六

た

泰澄和尚傳　卷中、七五
達磨和尚觀心破相論　卷中、七〇、七一
大乘起信論義記　卷上、九
大乘玄論　卷上、六
大乘本生心地觀經　卷上、三一
大乘六情懺悔　卷中、一八
大慈恩寺三藏法師傳　卷上、五五
大般若波羅蜜多經　卷上、四六、四七、四八
大方廣圓覺修多羅了義經　卷中、四、五、六
大方廣圓覺略疏注經　卷上、五七
大方廣佛華嚴經　卷上、二九、三〇
大方廣佛華嚴經疏　卷上、一一、一四、一五
大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔　卷上、一六、一八、一九、二〇、二一、卷中、一七
大方廣佛華嚴經談玄決擇　卷中、二一、二二
大方廣佛華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品　卷上、四五
湛睿書狀　卷下、三八
題未詳　卷下、六一

ち

智藏書狀懸紙　卷下、五九
定善義聞書　卷中、五七
定善義問答私見聞　卷中、六二
定善示觀緣　卷中、六二
重編天台諸文類集　卷上、七〇、七一

て

傳述一心戒文　卷中、三五
傳法正宗記　卷上、四四

と

當齋忌日伸追遠文　卷下、二八
唐朝京師善導和尚類聚傳　卷中、七七
德儉遺誡　卷下、四〇
德儉遺表　卷下、四〇
德儉辭世頌　卷下、四〇
曇鸞註論聞書　卷中、六八

な

南史　卷上、七七、七八

ね

涅槃經疏三德指歸　卷上、六〇
念誦集　卷中、八五
念佛助行要文集　卷中、五三

の

能仁の律詩　卷下、三〇

は

般舟讚管見鈔　卷中、六三、六四
般舟讚要略記　卷中、六六
般若波羅蜜多心經幽贊　卷上、七
般若波羅蜜多心經幽贊添改科　卷上、八
萬鏡靈瑞麗氣記　卷中、三八

ひ

表無表色章科分　卷上、二二

ふ

扶新論　卷上、七三、七四
佛說盂蘭盆經疏科分　卷上、二七、二八
佛說方等泥洹經　卷上、五一
佛母大孔雀明王經　卷中、三七、三八
文翁の聯　卷下、三一
文苑英華　卷上、七九

へ

別異弘願集　卷中、五一
別傳心法儀　卷中、三三
勉學　卷中、三四

ほ

法華義疏　卷上、三三
法語　卷下、四二
法事讚下管見鈔　卷中、六四
法事讚要略記　卷中、六六
法智遺編止疑書　卷上、六八、六九
卜華書　卷下、五、六

ま

摩訶止觀　卷上、六〇

み

彌陀本願義　卷中、四六、四七
妙法蓮華經　卷中、一、二、三
妙法蓮華經文句　卷上、六〇
妙法蓮華經論子注　卷中、七七

め

明儒願文集　卷中、八六、八七

も

文選集注　卷下、一、二、三、四

や

藥師瑠璃光如來本願功德經　卷上、三六

り

理覺書狀　卷下、二三、二四、三五
良然書狀　卷下、四一、四七

れ

列子抄　卷下、八、九
連哥百韻　卷下、一一、一二

（備考）此索引に於ける配列の順序は假名遣に據らず、發音に據る。又祭淸凉大師文の如きは、淸凉大師を祭る文と訓む故、まの部に入るべきなれど、最初の文字の發音に據り、さの部に收めたり。此類尙一二あり。

昭和九年七月二十日印刷
昭和九年七月三十日發行

（金澤遺文奥付）

京都市左京區下鴨泉川町五十三番地
編纂者　大屋德城

京都市中京區新町通竹屋町南
印刷者　中村竹四郎

京都市中京區新町通竹屋町南
發行所　便利堂

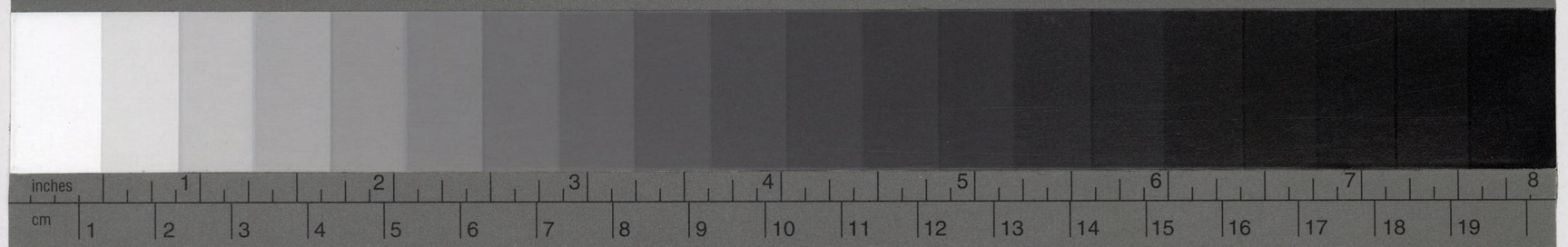
不許複製

Kodak Gray Scale

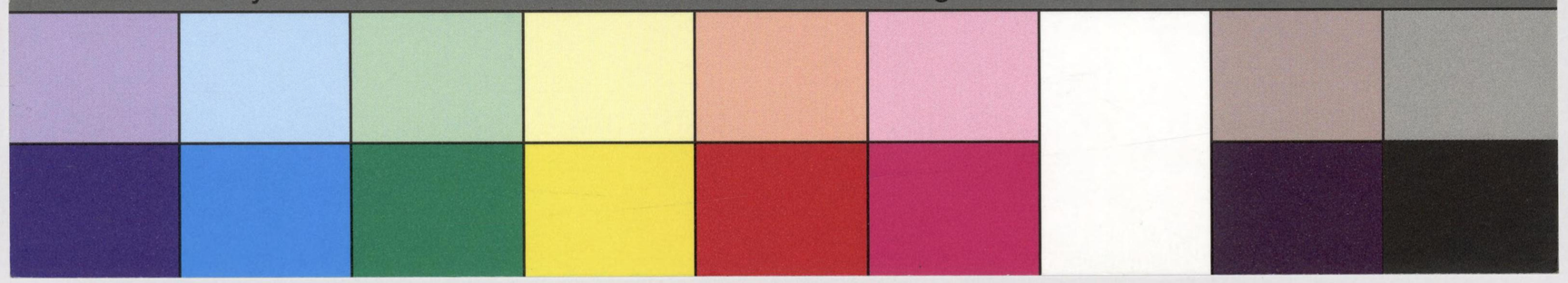
C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black